超克（ちょうこく）　～彼らは無様だったのか～

馬場駿

1

西高東低の気圧配置はほとんど生ぜず、寒に入る前から湾岸低気圧が規則的に列島にやってくる妙な正月も、何かと忙しく動いているうちに気がつけば二十五日を過ぎていた。

小高い丘の南東側に建つ鶴山ハイツは、家賃が比較的高いという欠点はあるものの海一望で日当たりも良く住みやすい環境下にあった。間取りは二ＬＤＫ、仁科雅も夫の蒼汰も仕事をもっていて同時に自宅に居る時間が少ないので住み始めたころの感覚では広すぎるほどだった。ところが長女汐里が生まれてからは少しく事情が変っている。ベビーベッドに入れておけば邪魔にもならない赤ん坊から幼稚園の年長組へと育つにつれて手狭感が増してきたのだ。

「汐里、テレビ視てないでお洋服着替えなさい、ママが先に病院に行っちゃうと一人で幼稚園に行くことになるよ、いいの？」

日勤の日は毎回概ね同じシーンが繰り返されるが、いつまでもぐずぐずしている日が定期的に訪れる。

「いいもん、パパと行くから」

一度間に合わないと言って蒼汰に車で送って貰ったことがあり、味を占めたのか、新型ウイルス対策の時間差出勤で朝に余裕ができた蒼汰に甘えだしたのだ。小さくても女、油断がならない。

「俺が連れて行くから、君は急げ。この子はぐずると長引く」

「もう、蒼汰は甘いんだから」

「君こそ自分の出勤に汐里のペースを合わせようとしている。我が儘はどっちか、判定は微妙だ。汐里、今朝はパパが送る」

食卓にノートパソコンを置いて何やら入力しながら蒼汰は、締め括りの言葉でわざとらしく胸を張った。

「やったぁ」

妻帯者とはいえ男、若い女には甘い、油断ができない。そんなバカなセリフを腹中で発しながら雅は身支度をし終えた。

「じゃ、行ってきます、頼むね、蒼汰。帰りは園児送迎用のバスだから安心だよ」と汐里の顔の方を見てうなずいた。

「分かってる、何度も同じこと言うな、俺は園児じゃない」

「はいはい、ごめん」

「はいという返事は一度でいい。うちの会社でやってみろ、商談は

その場で壊れる。病院は違うのか？」
「患者さんに対しては原則タメグチ、一部で幼児語もあり。敬語や丁寧語は患者さんとの距離を拡げてしまうから。じゃあね～」と夫に向かって、胸の高さで手を振った。
「バカ、三十一の顔でやっても可愛くねぇだろ」
それでも蒼汰は自分で意外ながら笑みをこぼした。
「汐里、幼稚園から帰ってきて一人で鍵開けて待ってるのか」
「おばちゃんが来てる日もあるよ、オヤツくれたり。ママがいる日もあるし、いろいろだよ」
蒼汰は最近の日常的な家庭事情をほとんど知らない自分に驚かざるを得なかった。頭はいつも仕事など外のあれこれに追われていたのだ。「いや、違うか、女でも…」と苦笑いする自分がいた。

病魔は自分が何者かを隠すようにしてゆっくりと襲ってきた。定年退職後に顕著になった頻尿のせいで、伊勢雅志はこの日も午前三時に尿意を感じて目覚めた。
真っ先に違和感を覚えたのは左手指の痺れ。それ自体はしばしば経験していることだが、いつも原因は寝返りなどで寝間着が乱れて血流を妨げたというものだった。「またか」と大して気にもせず腕を摩りながら布団の上で起き上がり中腰になったその時、左脚が力なく崩れ頭と左肩を同時に箪笥にぶつけ、その反動で布団の上に転がった。
隣に寝ていた幸子が寝ぼけた声で「何、大丈夫？」と一瞬こちらを見た。
照れ隠しで小さく笑い、フラフラと歩いてトイレで用を足し、無事床に戻って朝を迎えた。ところが予想に反して夜中に生じた体の異変は一日中消えなかった。ただ、痺れても左の手指の機能は普通であり、左脚の筋力は落ちながらも支え無しで歩ける程度だった。重篤な傷病名を思い浮かべなかった所以だが、この時点で一応脳の異状を考えてはいた。さらにパソコンでも調べたが、素人の悲しさ、実際の症状の軽さが目くらましになって調査結果として出てきた疾患の全てを否定している。とくに脳梗塞はとんでもないこととして意図的に消し去った。もしそうならもっと症状が重いはずだと。
翌日、午前四時が朝と呼べるかどうかは別として、目覚めたときは素直に「生きている」という実感に想いを繋げた。否定はしていても潜在的には脳に関する疾患を恐れていたらしい。しかしそれも束の間、用足しをすべく寝床から起きようとして仰天した。左腕も左脚も動かせないのだ。寝返りできない、立ち上がれない、余りの衝撃に横で寝息を立てている幸子に声を掛けることすら出来なかった。どうなるのだ。寝たきり老人、その言葉が現実のものになりつ

つある。いやすでに確たる現実だろう。半身不随では動き回れない。喉が渇いてきた。唾も出ない。十分か二十分か長さは定かではないが、呆然としてシーリングライト内の小さな灯りを見ていた。

「これで終わったな」その想いが目頭を熱くした。

いや、起きられるはずだ、立ち上がれるはずだ。むくむくと沸き上がった怒りにも似た感情が、健常に近い右半身を鼓舞した。真横に在る箪笥の比較的高い位置の抽斗を右手で掴んで引いて上体を起し、やや上体が浮いたところで右足を高く上げ勢いよく振り下ろすと同時に顔を前に突き出した。上体が直角まで起きたところでより高い位置の抽斗を引き、力の方向を垂直に変えて右手の腕力に全てを託して右膝を立てた。さらに目の位置が箪笥の最上部に達したそのときだった。動かせない左足を何とか引き上げようとしてバランスを崩し、反射的に抽斗に掛けていた力の方向が水平に転じた。万事休す、抽斗を伴って無様に布団の上に転倒した。

さすがに幸子が何事かと飛び起きた、眼球をそれこそ目いっぱいに大きくして、一言も発せずに固まっている。

「幸子、救急車呼んでくれ。脳に異状が起ったらしい、頼む」

「でも、こんな早い時間に？」

「ばか！　こんな時間だから救急車なんだ！」

伊勢は怒鳴った自分に驚いて目を瞬かせた。

伊勢が救急車から降ろされストレッチャーで急ぎ搬送されたのは、救急患者を即刻検診して所見を消防署の救命士に伝えるとともに救急医療措置を講じる特別な場所だった、救命室か救急室か病院独自の呼称は分からない。

入室するとすぐに数人がストレッチャーの周りに集まり、掛け声とともにいつの間にか隣に並んでいた病院のベッドに移され、あっという間に分厚くて布地ではないカーテンに囲まれた空間に据えられた。三人のナースが次々に現れ素早く体温や血圧を測り点滴の用意を始めた。

「伊勢さん、ここがどこだか分かりますか？」

年配のナースが耳元で言った。

「一一九で運ばれてきた市内の病院です」

意識の明瞭さを確認したいらしい。

「妻の幸子と一緒です」

「生年月日と年齢を教えてください」

「一九五二年四月二十日生まれで六十九歳」

「はい、ありがとう」

既に難聴に近いので正確に聞き取るほうが大変なのだが看護師は承知しているかのように顔を近づけていたので助かった。さらに

いくつか質問をしてから遠ざかっている。
　室内の激しい人の動きとベッドや医療機器が移動を繰り返す慌ただしさがこの場所の緊迫感を弥増している。おそらく顔も名前も知らない救急患者がだだっ広い室内に数多居るに違いない。言い換えれば搬送中から引き続き自分が無様だとか惨めだとか意識しているだけで、立ち働く医師やナースたちにとっては「それらの中の一人」というだけの存在なのだろう。気になって頭を少しもたげて足元の向こうを見ると、運んでくれた救命士の一人と半袖の黒い制服を着た医師が何やら話し込んでいる。おそらく搬入経緯の詳報でも受けているのだろう。だとすれば、付き添ってきた幸子からも聴取するはずだ。それは当然だが彼女は通報する直前の寝床から起き上がることが出来なかった忌まわしい病状を見ていない。うまく語れるのだろうかと心配になったが、まあいいかと自分に言い聞かせた。医師にどう判断されたとしても、自分は脳をやられた患者で俎板の上の鯉でしかないのだからと。この後、ベッドごと運ばれた場所が二つある。現場の表示によれば先ずＭＲＩ室、ついでＣＴ室、戻されてしばらくすると、薬品名は知らないが点滴が二袋で本格的に始まり、何やら小さな機器に指一本を挟まれ、胸を開けられておびただしい配線の検診器を貼り付けられた。医療番組でよく見かける患者の姿に自分がどんどん近づいていく。
　いろいろ段取りをしていたナースが周りから消えた後で始めて見る制服の女性がスペース内に入って来た。
「ずっとこの部屋ですか？　何日ぐらいかかりますか？」
　施された機器を点検・確認をする彼女の穏やかな雰囲気が緊迫したこの部屋とミスマッチだったので、思わず声を掛けてしまった。
「病室はいま、療養病棟の方で検討中です、患者さんが多くて病室のやりくりをしています、もうすぐ分かりますよ。何日ぐらい入院が必要かはこの後先生が来ますから聞いてください」
「さっき検査室に行った結果も知りたいです、病名もですが」
「それも先生がお伝えしますから。今はご自分を落ち着かせることに集中してください。大丈夫ですよ、点滴中のこのお薬も良い薬ですし。それに今は細かくご説明しても記憶に残るかどうか。先生が奥さんに説明しますからご心配なく。その他いろいろ気になることがあれば、症状が落ち着いたら病室で担当ナースに質問したらいいと思います、先生でなければ答えられないことは取り次ぎますし」
　ナースが付き添ってきた幸子を奥さんと言ったときに胸がざわついた。年頭に経済的な理由で協議離婚したばかりだったのだ。もっともまだお互いの住いを行き来しているのだが。当面黙っているしかないと思った。妻ではないと知れれば幸子の病院内での言動に制約が生じるが、ほかに親身になってくれそうな親族はいない。たと

え息子に頼んだとしても仕事優先ということで来られはしないだろう。だいいち鬼嫁が許すわけがない。
「気になるので一つだけ訊きます、この指先に挟んだ機器は何ですか、気味が悪いので」
彼女は「パルスオキシメーターといいます。採血して検査をしなくても血中の酸素濃度が測れる優れものです、数値が九十六以上なら呼吸機能は現時点で大丈夫となります」と答え、こちらの額に手を当てて覗き込み「伊勢さん、いまわたしを試しましたね」と囁き、微笑んで遠ざかった。ナースは職業柄香水を使わないと思うが、馨しい香りが鼻腔を心地よく刺激した記憶は大事にしようと思った。
それにしても、脳梗塞嫌疑で搬送されてきた患者なのだから当然かもしれないのだが、何の点滴なのか、取り付けた機器は何のためなのか、それらは一切その場で知らせてはくれない。考えてみればこの部屋は一面恐ろしい場所でもある。医療従事者に対する全幅の信頼がなければ一時も心が休まらない、そういうことになるからだ。搬入されてすぐ検温があり、血圧が測定され、その他諸々が男女看護師によって行われたが、正直なところ何かされるそばから時系列的な記憶が消えていった。脳が自らへの不安を除くためにそうしているのだと伊勢は特別気にしないことにした。
ベッドサイドに誰も来なくなってから救命士たちが帰ったらしいと気づいた。あちこちの緊急措置が終わったのだろうか、比較的静かになったせいか眠気が襲ってきた。必死に抵抗している自分がいる。眠ったら最期、そのまま目覚めない。それを否定できない脳の疾患への潜在的な恐怖感は半端ではなかった。
「かけいです」と短く名乗って寄って来たのは、救命士と話していた黒い半袖姿の医師だった。名札が「筧」という字を教えている。
「意識ははっきりしているようですね」低音で静かな口調だった。ナースの報告が済んでいるらしい。
「そのつもりですが眠いです」と微笑してみた。
「ははははっ、それなら僕も同じです」と軽く受けた後で医師は「右脳に生じた脳梗塞です。奥さんによると初めて症状が出てから二十四時間以上経っているようですね、病状は固定しかかっています。喫緊の課題は脳の他の場所で同様の血栓が生じないようにすることですが、治療を開始した後でも現在の症状が悪化することも多々あります。その両方に対処します」と続けた。
後半の治療中の症状の悪化云々はこの病院でも起こり得るとのある種の予防線なのかもしれない。そう思ったので無遠慮にそのまま口にした。
「それもある、否定はしない。最近は何でも医療訴訟に持ち込むからね、患者側は。うん、すばらしい、そういう返しがすぐにできる

ということは脳内の健全さの証だ」医師は半ば笑いながら手足の麻痺状態を丁寧に確認しだした。
「先生、治りますか、この手足」
「治る、の意味内容は発病前の状態に戻るという意味かね？　左足で僕を蹴飛ばすような気持ちで押してみて」
「はい」
「かなり力が残ってるね、よし。難しい質問だね、それは。すでに生じている片麻痺を克服するのは我々医師ではなく、伊勢さん、あなた自身です、われわれスタッフにできることはそれを手伝うことだけ。脳梗塞は再発率が高いし、戦うにはそれ相応の覚悟が必要です。あなたがすでに治療中の糖尿病とは違って、病と一生付き合うなどという悠長な相手ではない、強い意志で闘う必要があります。寝たきりや転倒死に直結するリスクレベルが違いますから。すぐに始まるリハビリもまた苦闘だと肝に銘じてください」
鼓舞なのか、脅しなのか境界線上だなと内心苦笑したが、誠実な率直さで少しも嫌な感じはしなかった。
結局伊勢はこの部署の司令官らしい筧医師にも突っ込んで問いただせなかった。呼び寄せた論理的な思考が医師の話を聞いている間に脳のどこかに隠れてしまう。そうなってから口を開けば愚痴同然の訴えにしかならないからだ。この先の自分に何が残されているのか、眠りの中に逃げ込みたいほどの課題だった。
「おとうさん！　助けて、左足が動かない」
突然の叫び声、それは子どもではなく老婆の声音だった。いつの間に搬入されたのだろう、隣のスペースに居る救急患者らしい。すぐにナースが走り込む。「おとうさんはお家に居るのよ、ここは病院なの、安心して」と宥めている声も聞こえた。これで終わりならほっこりと心温まるシーンだが、現実は違った。老婆はこの後、十数回連続で同じ台詞で助けを求めたのだ。初めの数回はナースが多忙な中で対応していたが、あきらめたのか誰も構わなくなった。老婆の声が一層大きくなる。ようやく腹が立ってきた。こちらもまた左半身が麻痺なのだ。短い間隔で同じ訴えをされるたびに患部をしたたか叩かれているような気持ちになる。呪いの言葉を繰り返されているようで我慢は限界に達した。
「うるさいなぁ、甘ったれるな、少しは周りの迷惑も考えろ」
極力声は抑えたつもりだったが、この罵声で目に入るナースたちが一斉にこちらを見た。胃が自分の汚い言葉に反応して騒いだ。炎暑の中で氷水を一気飲みしたときのあの、痛いような収縮の感じに似ている。
気持ちを忖度したい相手とそうでない相手がいる。伊勢の中で後悔はなかった。十分聞こえたらしく、この後老婆の執拗な訴えは消

えた。何のことはない、理性で感情をコントロールできている。彼女の言動が病状の一つではなかった証だ。

「伊勢さん、病室に移動するよ」

先刻の穏やかだったナースの声に少し慌てた。老婆を罵倒したことを責められるかもと思ったのだ。しかしそれは杞憂で、他のナースが三人ベッドの周りに陣取ったかと思うとかなりのスピードで廊下まで運び出された。件の彼女は点滴装置を引きながら伴走をしている。

たぶん幸子が承諾したのだろうと伊勢は理解したが、意外にも運ばれたのは五階療養病棟の個室だった。個室に保険は利かない。

救急室用のベッドから病室のベッドへと四人のナースの手で「一、二、三」の掛け声で一気に移され、乗って来たベッドは一人のナースとともに病室から早々に消えた。最初に声を掛けたナースが点滴装置を正規の位置に置き安全確認らしきことを始めた。「看護師仁科雅」ちょうど目の前にきたネームプレートで分かった。上目遣いで点検の様子を見ているうちに、他の二人のナースにブリーフを脱がされ、予め病室に備えてあったらしいテープを利用するタイプのオムツを着けられた。

「いちおう声を掛けてから下着を剥いでくれませんか」少しムッとして口に出してしまった。

「反応が正常で嬉しいわ」と近くの雅というナースが笑顔で返してきた。声を掛けた二人のナースは手を休めずにいる。

「理性が言わせるわけですから」と、さらに彼女が付け加えた。

そう返されては二の句は継げない。

それにしてもここまでで入室から五分と掛かっていないのではないか。若い子も含め女性に極限まで萎縮した男の証を見られたことになるのだが、こちらの羞恥や躊躇いを許さない迅速さだった。上半身の方は救急室で既に肌襦袢に似た寝間着に取り替えられている。胸部を広く開けないと心臓機能を診る機器を着けにくいからだろう。天井から俯瞰したら、さぞかし滑稽な姿に違いない。それにしても見事なチームプレーなので、思わず「すごいもんだな」と声に出してしまった。

「ありがと」雅が笑顔で覗き込むようにしてまた言った。

不思議な印象を与えるナースだとあらためて顔を見詰めた。

幸子はナースたちが退出してしばらくしてから来た。聞けば筧医師から病状とこれからの治療計画について説明があったという。いくつかの文書に署名して来たとも。脳梗塞そのものへの治療期間は、あくまでも現在の見通しでだが四週間だという。語る彼女の顔は心なしか明るく見え、声も沈んではいなかった。

「つまり治るってことだもの、良かったじゃない」

「ああ、頑張るよ、命だけは拾ったようだし」
「頭も大丈夫だよ、呂律だって回っているし」
それでも伊勢は思う、それは根拠のない楽観だと。きっと諸々の障碍が顕著になるのはこれからだと。すでに頭の働きは常の自分ではないし、感情の起伏も激しい。脳という外からは見えない人間の司令塔は一筋縄ではいかないに決まっているではないか。しかし暗い話は一切しなかった。全て自分が覚悟をしていれば済むことなのだから。
急な入院で身の周りのあれこれが揃っていない。幸子は必要なものを購入するためにと、早めに帰宅をした。

「ミヤちゃん、五〇五号室に入った伊勢雅志さんの担当に決まったから今日から宜しく」
療養病棟のスタッフステーションで福本美寿穂看護師長が雅の肩を叩いてうなずいた。
「はい。そうしますと今日は宿直に変更ですね」確認は大事だ。やんわりと長時間勤務になることを抗議する意味合いもある。
「そうね、十一時から十六時まで休んでください」
幸い確認した意味は通じた。
病棟での担当医は三十三歳と若手の部類に入る溝口豊だとつげたあとで師長は、「溝口先生は温和で優しい人だけど、入院したての患者さんに舐められる傾向があるのよ、ミヤちゃんも母型ナースだからあえて言いますけどルールは守らせてください」と命じた。
「分かりました、ご指導有難うございます」素直に受けたがこれも雅にとっては皮肉に近い。
母型ナースと父型ナースという区別は福本師長独自なのかもしれないが、この病院ではリハビリが絡む脳神経外科や整形外科でよく耳にする。発症、負傷から一、二週間の急性期は面倒見のいい所謂痒い所に手が届くタイプのナースが適任だ。一方回復期に入ったあとは患者に対し自立に向けた厳しい姿勢も求められるので身体不自由な患者が難儀しているとすぐ助けてしまうタイプのナースだけでは目的が達せられない。「手を出すな、但し傍に居ろ」の教えを怜悧な目で厳守するナースが不可欠になる。しかしこの役は傍から見ると冷たく映る。前者を母型、後者を父型と大雑把に分けて配置しているのだった。双方を臨機に演じ切るナースが最適なのは言うまでもない。
「あっ、それと救急室のヘルプありがと。次々に救急患者が入るのに急用で休んだナースが二人いたらしいの、もう大丈夫だから」
「いえ。でもあそこは戦場みたいなところなのでお役に立てたかは疑問です、すみません」これは本音だった。現場の看護師の本気度

を間近に見て、自分自身の日常を省みた結果だった。

伊勢が入室してから訪れた男女の看護師は計五人、つまり特定の看護師が決まって世話をするというシステムではないらしい。しかも意外なことに全員が比較的若かった。もちろんそれぞれ来室目的は違うし、こちらからコールして来てもらうこともある。介護おむつ、ゆかた式の寝間着の常備確認に始まって、検温、血圧及び脈拍数、血糖値の測定、ベッドに居ながらにして食事をするためのオーバーテーブルの設置、昼食の搬入と食器の回収、尿瓶の設置と放尿時の介助、もちろん最重要の点滴のチェックなど枚挙に暇がない。

皆親しみやすい雰囲気をもっていたが、機器点検と体調聴取に来た看護師だけに声を掛けた。端整な顔もだが仁科雅という名前に記憶があったからだ。あれからベッドですぐに眠りに落ちたが幸い名前の記憶は消えてはいなかった。二種類の点滴液がなかなか減ってこないのに不審を抱いたことも動機だ。不審を不思議と言い換えてもいい。

「これ、いつごろ終わるの」自分でも呆れるほどに単純な訊き方だった。

「十時間から十二時間はかかるの、このお薬。よく効くけどけっこう高価なのよ、これ」

価格を口にされたので伊勢はつい笑ってしまった。

「それはどうも有難うございます」

「あ、おバカでしたね、わたし。忘れてね、いまの」

明るい笑顔でともだちに対するようなタメグチに心和んだ。最初の部屋での言葉遣いとは少し違っている。

「驚くほどたくさん看護師が来るんだけど、こんなに大勢の人に世話になるのは心苦しいんだ。ここのルールなの？」

雅は専門的なことを説明するときは別として同僚たちがそうするようにタメグチを心掛けている。ただ、以前の病院とは真逆な対応なので時々丁寧語と混ざってしまうことが多い。

「この療養病棟では完全看護が原則でね、チーム医療といって患者さんの個々の情報を共有して全員でケアするの。でも一応担当は決まっていて伊勢さんの場合はわたし、ベッドのフットボードに掛けてあるプレートに主治医の溝口先生の下の欄にも名前が入ってます。お名前の雅志さんとわたしの雅の漢字が同じですね、何かのご縁かも。という訳でよろしく」と雅は笑顔で会釈をした。

何でも訊けそうなナースがひとりでもいるのは心強い。伊勢も自分なりの特上の笑顔でお辞儀を返した。

「主治医は筧先生じゃないの？」

「救急室とこの病棟の担当医は別なの。もうすぐ溝口先生も来るよ」

彼女専用の運搬車なのだろうか、一部の検診機器と一緒に可愛いマスコットがぶら下がっていて、一番上の台にノートパソコンが載っている。今回の来室では諸々の検診がないらしい。

「夜に点滴液が無くなったらどうなるんだい？」いくら空気血栓が予防されていても機械のことだ、素人としては気になる。

「二十四時間の看護態勢だから当直の看護師が必ずきます、安心して。夜昼を問わず、おしっこのときもお通じのときも絶対コール釦を押して呼ぶこと、昔で言うナースコールね、一人でしちゃダメ、もし転倒したらこれから先の入院生活が窮屈になって取り返しがつかないよ」

この注意の時だけは雅も射るような眼をした。看護師長の指示に従ったかたちだ。

目標とか理想論でいうなら完全看護は立派で有難い。だが果たして運用面でどうなのか、少し前に聞いた個々の患者の個人情報の共有もそうだ。どうやって全うすると言うのか。目の前に居るナースには失礼になるのだが、皮肉屋になったいまの自分には実現不可能としか思えなかった。もちろんそれを直に口にするほど理性はまだ侵されてはいない。伊勢は、ナースの真剣なまなざしを受けてそんなことを思った。

大袋二つによる点滴は、きのうの消灯時刻だった午後九時までには撤去されるだろうという伊勢の勝手な予測は無情にも外れ、二つとも点滴液が無くなる寸前に満タンの袋で更新されてしまった。さらに十二時間以上心身ともに強く拘束されることになる。

脳に起こった異状が引き起こすのか、常の生活では経験しなかったことが漸く表れ始めた。最初に気づいたのは頻尿且つ少量という排尿の問題だった。漏れるという切迫感で尿瓶に飛びつくのだが結果は数秒で放尿は終わる。糖尿病に関する本でマックス五百ＣＣ程度と記憶している膀胱の容量からすれば考えられないことだった。ベッドサイドの床に置かれている尿瓶に飛びつくという行為を一人でしてしまうことについて二十代のナースから注意を受けたのもショックだった。切迫感を考慮していないと感じたのだ。コールして来てくれるまでが短いとは限らないからだ。

「君たちはコールしたらベッドの上で必ず待っていて欲しいというけどね、三分、五分はかかる、いや、一番待ったときは十分に達した。目の前にあるのにバカみたいだとは思わないか」

たまらずに怒ったことも二度や三度ではない。そのたびに狭量な自分が許せなくなって落ち込んだ。もめるのが嫌で脂汗を意識しつつ固まって待っているときの惨めさも半端ではない。

それに頻尿の名の通り夜昼併せて二十回に及ぶ切迫感のたびに

看護師業務の邪魔をしてしまうこと自体、堪えられなかった。「役立たずの迷惑な存在」になることが許せなかったのだ。

さらに困惑したのが、麻痺したはずの左腕が勝手に動く現象だった。とくに夜間、左脇腹にピタリとついている左腕がその存在を自己主張するように重さを脳に伝えてくるのだ。そのままにして無意識に左に寝返りを打とうものなら下敷きになった左腕が悲鳴を上げる。二つの理由で伊勢は利き手を使って脇腹との距離を拡げるのだが、押した右腕を元に戻した途端、左腕が自動的に脇腹に付くべく戻ってしまう。まるで「私のことを邪魔にしないで、忘れないで」と訴えているかのように。何度やっても同様で、救急室でわめいていた老婆のように叫んでしまいそうで恐ろしかった。かくて睡眠は点滴、頻尿、左腕という三つの刺激で睡眠はズタズタに割かれることになる。熟睡どころか連続二時間の睡眠も叶わなくなった。

更なる異状は奇怪なかたちで現れた。しかも発症は夜間ではなく真っ昼間に突然起こったのだ。

白い天井、白い壁と病室はほとんど明るい白一色だが、その全体がスクリーンになった。たぶん青少年期に実際に見たのだろう、コミックが一ページごとに映っている。コマ割りもそのままに台詞もノンブルさえも正確に投影されている。しかもそれぞれが違う作品だ。それらが実際に視ている病室の景色にオーバーラップされている。マッピングと言ってもいいかもしれない。何？　何が脳に起こったのか。目を閉じれば消える。開ければ見える。繰り返すたびに画像が変る。夢なのかと伊勢は利き手で目を擦り細かく頭を振ってみるが怪現象は止まらない。足元から恐怖が首へ頭へと上がってくる。現実なのだと絶望感が襲ってきた。介護ベッドのギャッチアップ機能を使って上体を起こし、アングルを変えて否定しようとしたが無駄だった。二袋の点滴二日目に始まったところをみると、脳の血流や脳内圧力とやらがもたらすのかもしれない。片麻痺に因る不自由さや失敗を面白がるという現実逃避の手段もこの怪現象については使えない。苛立ちレベルの問題ではなく命に係わるかもしれない恐怖だからだ。現象は、夜間でも室内を明るくしている間だけだが続いた。見える内容も変化する。コミックだけではなくレポート用紙にぎっしりと書かれた文章も現れ、しかも読み取れるほどに鮮明だった。一体脳のどこに仕舞われていたというのだろう。極端な不眠に陥り、心の震えは身体にも伝わって来た。

最初は医師にも看護師にも言わないつもりだった。誰が信じるだろう、狂人扱いされてはたまらないと。しかし、耐えきれずに伊勢はナースコールをした。いや、それは無意識だったのかもしれない。

気がつくとベッドサイドに担当看護師がいた。

「雅さん、このまま頭が壊れるんですか」と彼女の腕を掴んだ。体

の震えは説明するまでも無かったが、怪現象については細切れで乱れながらも訴えるしかなかった。来たのが他のナースなら表現は控えたような気がする。

雅は掴まれた腕を強いて振り払おうとはしなかった。聞けば伊勢が動転するのもうなずける。患者の恐怖に寄り添うべきだと思った。

「副作用に譫妄ってあったかしら、あと一日、点滴が終わって明後日に症状が消えればはっきりするわね、溝口先生に報告するだけにしましょう」雅は自分だけの中でそう応えると、伊勢の不安を募ってはいけないと判断して憶測に因る答えは口にせず、「大丈夫よ、うちの先生は名医だから安心して」と静かに口にすると、掴まれている腕をゆっくりと解き、両の掌で伊勢の右手を柔らかく握った。

和かで静かな時間だった。雅は数分後に左手を離してそのまま伊勢の額に掌を当て、そこからゆっくりと髪を撫ぜて「だいじょうぶよ」と耳元で囁いた。彼の震えは止まっていた。さらに数分後、伊勢の寝息が聞こえてきたのを確認してから小さく溜息をついた。

看護師として八年現場にいたが今回の事例は初めてだった。伊勢の右手を掛け布団に仕舞って廊下に出ると雅は、担当医の溝口に連絡をとった。

「譫妄かどうかは定かでないけどね、あるかもしれないな、なにしろ脳の世界は未知の部分が多い。そうか熱はない、眠りについた、そんな状態だったのではバイタルサインも何もないな、分かった。もうすぐこっちが終わるから診に行く。連絡するから君も来てくれ」

「承知しました、ステーションに居ますので」

雅はもう一度眠っているかどうかを確認するために病室に入った。

結局、二袋併合の点滴が終わり、小ぶりの点滴一袋に変わった後、伊勢の頭に起こった怪現象は終わった。「このまま頭まで壊れるのかよ」と、伊勢は何度独り口にして目頭を熱くしたことか。安堵が脱力感を誘った。あの日あのとき、担当医の診察で目が覚め、医師の隣に立っていた仁科雅を見たとき、二人だけのあの時間は夢だったのかと一瞬落胆さえしたが、確かに現実であることは握られた方の自由な手が憶えている。丸二日半狂わされた代償として嬉しく受け取っておこう。そう思った。

「雅、この前みたいに当日に突如宿直っていうのは断固拒否しろよ。五歳の女の子がいるんだぞ、病院側も少しは気を遣えってんだ、まったく。何のためのシフトなんだよ、君が言い難いんなら、僕が看護師長に電話しようか」

蒼汰の悪い癖だと雅は少しく顔をしかめた。朝の出勤前、しかも朝食のときに大小を問わず不満をぶつけてくるのだ。もっとも昼食も夕食も時間が合わないのだから仕方ないとも言えるが、結婚する

際の約束がある。互いに仕事を持って、家庭内のあれこれについては補い合い助け合おうという立派なルールだ。第一彼自身、納期が迫った企画書などのために突然会社に泊まり込むではないか。看護師は天職だと思っている、万一もう辞めろと夫が責めてくるなら結婚の方を捨て去る。それはプロポーズを受けたときからずっと変わらずに自分の中にある。

「仕事の性質上どうしようもないのよ、困らせるたびに謝るからさぁ、電話なんかされたら周囲からどれだけバカにされるか考えてよ」

「言ってるだけだよ、口に出さないとストレス溜まるだろ」

「じゃ、わたしもやろうかな」

「よせよ、我慢強い君らしくもないし、迷惑だ」

「誰の？」

「汐里の。ほら、困って黙りこくって食べてるじゃないか」

馬鹿馬鹿しいので雅は会話を閉じた。そうすると蒼汰が堪えられずに喋りかけてくる。基本的に子どもっぽいのだ。ところが蒼汰は爆弾ともいえる発言をした。

「うちの会社もリモート勤務始めることになった。とりあえず社員の半分。ウイルス対策としては早い方かも。僕はうちで仕事をするメンバーに入れられた。十五日からだ。汐里には悪いけど子ども部屋の四畳半を開けてくれ、受送信のための環境づくりから始める」

「汐里、パパのお仕事のためにいいよって言ってね」

「うん、いいよ、でもどっちと一緒に寝るのかなぁ」

「そうきたか、なるほど」蒼汰が機嫌良さそうに笑った。

雅はその笑いの中に何か気になるものを感じ取った。本社勤務で残る者と自宅でリモート勤務になる者、その振り分け基準が何なのか、善悪二つの解釈が可能な場合蒼汰は悪い方を採る傾向があるからだ。職域だけの区別ならいいのだが。

「何を考えてる、担当家事を増やすなよ、家で仕事、なんだからな」

「あ、ばれた？」

ここは雅明るく締めた。

伊勢は入院一週間でしみじみ感じたことがある。『人は産まれて生きて死んでいくだけ』とものの本で読んだことがあるが、介護ベッドの上で終日事実上の軟禁状態に置かれてみると、自分がやっていることのほとんどが食う、排泄する、眠る、の三つだけであること、しかもその全てが不完全だということに。正直なところ愕然とした。

一つ、小さい方の点滴をうけ始めた日のことだった。若い男性の看護師がタオル状のおしぼりを数本持って入って来た。体を拭いてくれるという。看護ではなく介護の範疇だと思っていたので少しく驚いたが、確かに自宅から計算すれば一週間以上入浴していないの

で有難く受けた。それに点滴の継続が必須な段階では入浴は無理に決まっている。患者側に拒絶権があるかどうかは知らない。訊けばこの行為は清拭(せいしき)というとか。上下肢から胴体を拭かれている間、いわゆる「しも」の部分はやらずに本人にタオルを手渡すのだろうと思っていたのだが、彼は真剣な態度で淀むことなく陰部でも作業を続けた。それは「そこはいいよ、自分で」というタイミングさえつかめないほどスピーディで淡々としていた。身を預けている自分の姿を想像で俯瞰して唇を噛んだ。無様だった。もちろん清拭完了と同時に丁寧にお礼は言った。ただ、立場の交換をしてみれば、患者に意識がなく物体のようになっているときの方が、達成感があるのではないかと思う。一方される側の伊勢にしてみると清拭をしてくれる人の性別がやはり気になってくる。今日のこの係がナースだとしたら羞恥と屈辱感に苛まれそうな気がする。

清拭をした日の数日後に病室で採血、採尿が行われた。救急措置が一段落した後で、患者の体の状態を総合的に調べる目的らしい。採血はスムーズに済んだのだが採尿のときにまた「しも」が絡んだ。この日の段階では通常の放尿は尿瓶に繋がる管の先の受口に尿道の先端、つまり鈴口を密着させてしていた。左手は麻痺しているので残りの手は一つでこれは受口を持つ。すると立ち姿ではベッドサイドの壁に設置されている縦手摺りを握って体を支えるという安全策がとれなくなる。この対策には苦心惨憺したのだが、介護ベッドの土台部分に在るサイドレールに両足の脹脛(ふくらはぎ)を密着させて立ち姿を安定させる方法を見出している。ところが検査のための採尿は、いつもの受口よりも狭い口の瓶にしなければならない。実現するには右手で手擦りを握りしっかり体の安定を図る必要があるのに手が一本不足する勘定だ。そこで採尿担当の男性看護師が採尿瓶の方を持つ係になり、彼の視線が当然局部に集中されるかたちになった。不可思議な屈辱感に襲われたせいか、いくら待っても一滴の尿も出てこない。間が悪いことはあるもので、彼の帰りが遅いのを訝ったのか、手分けして同様の採尿をしていたらしいナースが彼の名前を呼んで目隠しカーテンの中へ入って来た。看護師の世界では特別でも異常でもない景色なのだろう、状況を直視している表情はいたって平常だ。しかし見られている方は慣れていない。若い女性の前で醜態を晒していることになる。無様感が増幅し瓶には検体となるべき尿が一滴も溜まらなかった。

「せっかく室内にトイレがあるんだからあそこで、一人でやらせてくれないか」すでに声は悲痛なものになっていた。

「まだ許されていません」彼は眉一つ動かさずに否定した。

「許すとか許さないとか、誰が偉そうにしてるんだよ！　だってこっちはあそこぐらい歩いて行けるんだ、なぜだ！」

男女二人の　看護師は少し相談をしてから後刻再挑戦と決めて出ていった。

伊勢の反応は決して過剰ではないだろう。世間的には夫婦、親子、嫁舅の間の介護でも異性間の「しも」の世話は常に取沙汰されるらしい。介護される側の意識が健常者と変わらず明瞭である場合に顕著だともいわれている。

伊勢は、まさか自分がそれに酷似する経験をすることになるとは夢にも思わなかった。二人が出た後でモヤモヤ感を振り切る行為に出た。まだ介助無しでは利用不許可とされている病室内のトイレに入り、採尿瓶を握りしめたまま俯くと絞り出すような呻き声を発した。それは心の嘔吐かもしれない。では吐き出したものは何なのか。

「なんでこんなことに」と脳梗塞を呪い、心ならずも涙目になった。

その数分後、ノック音がして「伊勢さん、大丈夫ですか？」の声と同時に二人の看護師がドアを開けた。

「このトイレを使わせてくれたら何の問題も無いんだよ！」

伊勢は独り採尿を済ませた瓶を突き出して顔を歪めた。

「見た儘を偉そうな上司に報告しな、チーム医療か何だか知らないけど、ここは密告システムなんだろ」

じつに嫌らしい言い方で胸がざわついた。自分の中で何かが弾けてしまったらしい。

無言のまま検体の入った瓶を受け取ると二人は、顔を見合わせてうなずき部屋を出ていった。

なぜベッドから一歩も動くなという伊勢にしてみれば馬鹿げて徹底した指示が出ているのかを自分なりに問うてみれば一つだけ思い当たる。

麻痺をした筋肉が弱り関節が固まってしまうのを防ぐために入院早々と言えるだろう、点滴袋が一つになるやいなやリハビリ担当の理学療法士が車椅子を引いて病室に来たことから始まる。その何回目かは忘れたが、点滴をしながらの訓練が終わり車椅子で先生の介助をもらい病室のベッドに乗るまではいつも通りだった。先生はこの最後の段階まで見届けてから去る。ところがなぜか部屋の入口のドアを閉め切っていない。うかつにも点滴をしたままベッドを降りドアを閉めに行こうとした。そのとき数人の女の声が耳に入ったので慌ててベッド上に帰ろうとして足がもつれた。結果はベッドに前向きのまま突っ込み、麻痺している左側の始末がつかずに無残にもがく羽目になった。背後から介助してくれたのが年嵩のナースで、しかも二人のナース研修生が傍に居た。客観的には万事休すだが、もちろん無傷で痛くもなかった。お礼も言い頭は下げたものの自分としては重大視しなかった。しかし結果は、転倒危険度トップの扱

いとなり、ナース仁科雅の警告通り極めて窮屈な日々が続いている。
　看護師の介助無しにベッドを降りることが出来ない。もちろんベッドから五歩で行けるトイレも使えず、尿瓶やポータブルトイレで用をたすことが求められ、しかも昼夜を問わずコール釦を押して看護師の到着をベッドの上で待たなくてはならない。寝間着に着替えるのに便利だとベッドサイドに立つだけでも駄目、ベッドから一歩踏み出せば開閉できるカーテンも自分でせずにコールしろと申し渡されている。命じただけでは不安なのか、ベッドを離れようとして動くと離床センサが働いて自動的にコールランプが点き、即座に看護師が反応して「どうしました？」とアナウンスが入る監視システムが急遽設けられてもいる。もっともこの装置が過敏すぎて寝返りも打てないことが分かり、我慢が限度を超えたので退院命令覚悟で抗議し、撤去をしてもらった。体の動きが大きいとマットが浮き沈みするがそのたびに反応するからだ。「眠らせない気か！」という返信での怒声はこちらの本気を伝えるには十分だった。
　設置時に何の説明もなく密かにベッドのヘッドボードに取り付けられた監視装置が撤去された日の夜、伊勢は冷静に考えてみた。自分が片麻痺でなく左右両方の、つまり手足全部の麻痺なら病院側と自分との間で想いの食い違いは生じなかっただろう。動きたくても不可能で当然ベッドに拘束される。病棟に移って間もなく来室した溝口担当医は、四肢全てを触診して筋肉の状態と麻痺の程度を確認している。
「何かスポーツをやっていましたか？　筋肉が六十九という年齢にしてはしっかりしている」
「ええ、多少。持病が食後高血糖なので運動療法は歩くだけではなく負荷を掛けた筋トレも六年間ぐらい続けていました、今度の発症までずっと」
　そのお陰か脳梗塞の後でも左下肢が脆さはあってもある程度の制御が利いて動いたのだ。もちろん、あの苦痛だった二袋の長時間点滴が効いたお陰に違いないのだが。
「うん、その分回復は早いかもしれない。急性期リハビリをすぐに始めよう。少しの間点滴をしながらの軽いトレーニングになると思うが、仁科君もそのつもりで頼む」
「はい、先生、それでリハビリステーションには」
「それは僕の方で出向いて伝えるよ」
　担当医の言葉とは裏腹に、リハビリタイム以外では重傷者と同じ軟禁状態になっている。不思議で仕方がなかった。患者の立場で言えば、残っている機能はできるだけ使って介助側の負担を軽くするとともに、一日も早く快方に向かい、自立したい。その姿勢のどこが悪いのか、ということになる。指示と禁止だけが飛んでくる。そ

の想いが日々追い詰められているという感覚に直結していた。

2

「伊勢さん、おはよう」の言葉と同時にパソコン架台を押してナース雅が入って来た。半月の間、毎日一度は顔を見ている。自然と連帯意識が生まれ親愛の情も大きく育ってくる。自分の中でだけだが仁科雅看護師をそう呼ぶようになった所以だ。

「昼夜合計の排尿は十二回、おつうじは今回もゼロ」

毎日訊かれるので入ってくるなり伝えることにしている。脱糞とか排便という言葉は使わない。彼女らが質問で使う言葉なので倣っている。糞や「うんこ」などは論外だろう。

彼女はパソコンにすぐに回数を打ち込むと検温計をこちらに手渡し、パルスオキシメーターを指に挟み、心拍数を確認しながら血圧計で測定を始める。ナース言うところのバイタルサインの確認だ。どの看護師が来ても流れはほとんど変わらないが、雅の違うところはソフトな笑みをずっと湛えていることだ。もっとも他の若い男女の看護師とて入室するときは元気で明るい。検診中に身構えた感じになるのは何か言われやしないかという警戒心の表れだと思われる。こちらへの評価がクレーマー紛いだということだろう。

「雅さん」口が勝手に名前で呼んだ。普通の呼びかけは男女を問わず「看護師さん」で通している。

「なあに？」家族に返すような狎れた響きがあった。

「何でこんな大変な仕事を選んだの、よかったら教えてくれないか」

彼女に限らないが医師の診療を補助し、傷病患者の看護をし、さらに患者の衣服の脱着から所作の介助、果ては尿瓶やポータブルトイレの始末など介護士のような仕事までしている。大変と言わずに何と言おう。

「それを語るのぉ？　はい、百十七の六十九。そのほかもいいわよ」

「差し支えない範囲でいいからさ」と答えを促した。

すると、出た数値をパソコンに打ち込みながら、「わたしね、思春期の頃にナースになろうって決めたの。高校、大学とその気持ちはずっと変わらなくて」と応じてくれた。

「貫き通していまのあなたがある」

「偉いでしょ」と胸を張ってみせた後で、「実は引き摺ってたってだけ」とチョロッと舌を出した。「五時四十分か、今朝は早く始めたからまあいいか。少し長くなるわよ」と笑った顔が伊勢には思春期の雅に見えた。

雅によれば中学生の頃、親も先生も同級生も周りの人全部がつまらなそうな顔をしていることに気づいたという。きっと自分もそう

だろうと思い、事実、心を動かす刺激はどこにもないと再認識をした。いつしか心が沈むようになって部屋に閉じこもり不登校が始まった。その結果著しく体調を崩し、父親の知人が院長をしている病院に入院をすることになった。さらに後で知った秘話があると続ける。実は担当した内科医の所見は無かったが、院長はなぜか入院と決めて一番若い准看護師を担当につけた。もっとも朝晩バイタルサインを計測するだけで他の看護行為はさせていない。さすがに雅は不審に思い、姉に話すような調子で訊いた。

「ねぇ、おねえさん、わたしどこが悪いの？　先生に訊いているでしょ、教えて」

雅は自分が病人だとして疑っていない。

「そうかぁ、まだ自分でも気づかないんだ」

「え？　病名って先生が決めるんじゃないの」

「みやびちゃんはずっとここに居たい？」

「ううん、治れば帰る。でもお薬も出ないしどうしたらいいか分かんない」初日からずっと不思議に思っていた。

「体の調子が悪い原因をたどるとね」

「そうそう、それが聞きたいの」

「みやびちゃんの胸の中にあるはずなのに院長先生にも見えない心という名前の器官があるの。この病院の中でそこを治せるのは一人だけなので、先生たちもわたしも、その人が気づいてくれるのを待っているだけ」

そう言うと笑顔で「またね」と病室を出ていった。

制服姿で明るく忙しそうに働いているおねえさんがまだ十代だと院長先生から聞いている雅は、さすがにここで初めて自分自身に病因があることに気づく。自分といくつも違わないナースの彼女と自分とのレベル差に改めて衝撃を受けたのだ。

「丸一日だったかな、自分と対話したの。それでお礼を言って帰りますと伝えると院長がすんなり認めて出口までおねえさんと一緒に送り出してくれたわ、頑張ってね、バイバイって」

伊勢は、二人の女の子の成長を企図した院長の采配を見事だと思った。

「それで目標が決まったわけだ」

「そう。他愛のない動機でごめんね、でもそこから一筋の道、考えてみれば単純な女の子だわ、わたし」

「ありがとう、仕事の邪魔をしちゃったね」

「だいじょうぶ、これも伊勢さんの日常生活の取り戻しの一つだもの。わたしにとっても無意味な時間じゃないわ」

雅は就職動機もどきの話を仲間内でもしたことが無い。伊勢という一人の患者にだけ伝えた意味を後で自分に問うてみようと思った。

入院から半月が経った。この間の平均睡眠時間は三時間半、しかもトレーニングルームに行くリハビリ時間を除けば相変わらずベッドの上だけの「生活」なので、苛立ちと不安が募り、心身ともに不安定になっていた。白が混じった無精髭は常態化し、頬はこけ、口元の左側がだらしなく下がってきたことも手伝って、洗面台上の大鏡の前に立つと発症前とは別人のように見えた。一日当たり千六百キロカロリーという糖尿病対策の食餌療法の影響は否めないが、むしろ精神面の問題が大きいのではないか。朝が来るたびに何とか前向きになって一日を過ごそうと思うのだが、病室に運ばれてくる朝食を独りで食し六錠の薬を嚥下したとたんに積極的な気持ちは跡形もなく消えた。

この日も午後三時に幸子が顔を出した。離婚届を七草が過ぎてすぐに二人で提出したのに、彼女にとって伊勢はまだ連れ合い意識が強いのかもしれない。もっとも伊勢も毎日のように来てくれることにいちいちお礼も言っていない。元妻の元の字を忘れているかのようだった。もともと相手が嫌になったからでもなければ何かトラブルがあったからでもない。老後の生活設計で互いにベターな方向を企図してのことだった。

「もう普通のパジャマでいいよね、二着持ってきた。ちょっと、髭は剃りなさいよ、おとといっ買って来たT字型のじゃ剃り難いの？刃が鋭い安全剃刀は病院で許可しないと思うよ」

「何だ、手首でも切るとでも思っているのか」と軽口を叩いてみた。

「私じゃなくて、病院なら当然の配慮でしょう」

「分かった、明日の朝にでも剃るよ」

「おとといもそう言ったよ」そう言いながら、昨夜伊勢が用足しのときに汚して脱ぎ捨てたパジャマなどを折り畳み、持ち帰るべくポリ袋に入れている。

「それより幸子、信人から連絡は無いのか？　入院の電話は入れたんだろ」

一粒種の息子は妻篠田亜矢が女将になっている居酒屋『のさま』で店長をしている。お客様は神様の意味だといい、女将の仇名にもなっている。店では彼女が神だからだそうな。店員の間では「また、ののさまがご立腹だよ」などという使い方をするらしい。

「救急車で担ぎ込まれた日の午後に電話してるよ、本当ならわたしにはもうあれこれの同意権が無いんだから。夫婦は別れれば他人、父と息子は絶交状態でも親子。世の中、みんな形が一番、実質二番」

「座布団一枚の出来だな、うまい。新型ウイルス対策で商売はあがったりで暇だろうになぁ」

「亜矢が止めてるのよ、お見舞い包むのもきついでしょ、いつ終わ

るか見通せないしね、フロア担当の女の子も休ませてるらしいから」
「お金なんか求めちゃいないよ、来てくれるだけでいいんだ」
「そうは考えない人なの、みんな同じ考えだと思ってしまうのは困った癖よ、あなたの。それに、お金を目の敵にして嫌ってる間はお金の方も寄って来ないわよ」
「はいはい、分かった。入院してるとニュースには疎いが、そんなに凄いのか、今度のウイルスって」病室には有料のテレビはあるがカードを買うのが面倒だし、音量を相当上げなくては聞こえないので迷惑をかけてしまうのも嫌だった。
「死人も出てるし、感染したくないからみんな自粛してるよ、呑み屋なんか真っ先にだめよ、もともと必要不可欠じゃないもの」
「亜矢は生まれてこの方金銭的なピンチなんて経験したことないだろうから、打たれ弱いかもしれないな。いよいよ貧乏人の我が息子の出番だな、面白い」
　伊勢は忘れない。信夫との結婚式の分担金割合から始まって、こととあるごとに伊勢家の貧しさを小馬鹿にし、万座の中で恥をかかせてきた女だった。婚姻届けの際の氏の選択でも妻の篠田を名乗ると譲らずにいた。信夫も信夫で亜矢のどこがいいのか、かなり相手の言いなりになっている。いまもって謎だ。
「ところで他人事じゃないのよ、いまあなたが借りてる家賃不要のボロ屋というか廃屋ね、家主さんいよいよ土地を売りに出すらしいの。そうなったらどうするの？」
　離婚と同時に伊勢は住まいを探したわけだが、二人で散歩をするたびに気になっていた廃屋があり、たまたま極安物件をと頼んでいた不動産屋の情報から持ち主が意外に簡単に見つかった。解体資金の無さや税金対策で荒れるに任せ’そのままにしていたらしい。伊勢は人が住んでいた方が近所も安心するし建物も少しは綺麗になる、生垣なども管理するからと交渉して賃貸借ではなく使用貸借状態でと合意が成ったのだった。家主の求めに応じてすぐに立ち退くという念書も渡してのことだった。実績を可視化するため伊勢は、早々に生垣を刈り込み西と東の接道側の樹々が道路に食み出しているトラブルを解決して見せた。脳梗塞発症直前のことだった。
「家主さんの勤務先も経営が難しくなりそうで、早期退職を打診されたとか、そんな話よ。どうする？　また物件捜すにしても家賃四つ分は必要になるよ、ここの入院費もかなりかかるし、離婚が裏目に出ちゃったね。戻って一緒に暮らしたらわたし、生活保護詐欺みたいになっちゃうし」動くなら前家賃、敷金、礼金、手数料が要る。確かに物入りだ。
　どうやらベッドの上で大人しく固まって暮らしているわけにもいかなくなったと伊勢は、天井を向いて唸った。少し考える時間が必

要だった。
「一月分いくらだった、ここの請求。二月十日に払ったよな」
自分が置かれた状態を具体的に知る必要がある。
「先月はたった五日間なのに十万超えてる、恐ろしいわね」
「国保の自己負担三割だよな」
「最初の集中治療はそもそも医療費も集中らしい。今月も同じというはずはなくて一日当たりの金額も下がると思う。でも、個室の負担に保険の適用は無いのね、全額そのまま負担よ」
「確かに薬しか飲んでないな、もう。食費は適用のはずだから個室から大部屋に替えればいいのか」
そもそも入院時に複数の患者が入る部屋が満室だったので選ぶことすらできなかったのだが、重症の頻尿で同室の患者に迷惑がかかってしまうという理由もあった。ある種のパニック状態の中、個室が全額負担ということすら頭になかった。
「幸子が筧医師にもらった最初の書類に確か、療養期間の予定が四週間と書いてあったよな」
「変更の可能性もある、だったけどね。まさか今月末で退院？」
「ああ、立ち退きの準備もあるし、左手はまだ麻痺だけど左足の方はある程度歩けるところまできている。とりあえずそれしか今は思い浮かばない」
家具、什器は幸子ともども元の賃貸物件に置いたまま身一つでボロ屋に移った伊勢なので、今度も引越しの荷造りや運送屋の手配などは不要だった。幸子に生活保護を受けさせてやりたい一心の離婚だった。二人一緒の収入合計だとギリギリだが受給資格から外れてしまうのだ。
「リハビリってそんなに甘くないと思うけどなぁ」
幸子もパートタイムの勤務先で同僚から脳梗塞の後遺症の情報を得ている。同じ病歴をもった家族を抱えた人が多いのには驚く。もしかしたら糖尿と同様の国民病なのかもしれない。「退院していいか溝口先生に訊いてみたら？」それしか言葉が無かった。入院直後に同担当医の助言で早々に介護保険の申請をしに市役所へ行っているが、それにしても、見舞いで通って伊勢を視ている限りでだが、一か月で退院できる回復度には見えない。
「それとリハビリの先生にも話してみるよ」
伊勢の声はさすがに張りが無くなっていた。いよいよ追い詰められてきたという印象だ。

雅は、「ちょっと来てくれ」と溝口医師に呼ばれてスタッフステーションに戻った。福本看護師長だけでなくリハビリ系の二人、田口理学療法士と野瀬言語聴覚士も居ることから伊勢のことに違いない

と直感した。
　案の定、伊勢本人から申し出があったということで、二月末日の退院を認めて大丈夫かどうかの確認をしたいと溝口が言った。
「知っての通り再発防止を主軸目的にいまは五錠の投薬で再発を防止しつつ経過を視ているが急性期は過ぎたとみていて早めに回復期リハビリ病棟へ移すつもりだった。病室は空いたかい？」
「四人部屋はもう開いてます。三段階で最も個人負担の少ない個室が開くのは三日後です」師長はよどみなく答えた。
「当初の見立て通り四週間で療養自体は何とかなる、問題はリハビリの進捗度だろう、歩行はどうだい？」
「はい、まだ杖を使って訓練に努めていますが、杖無しでも家の中を歩き回ったりは出来ますし、外へ出しても二百、三百は歩けるでしょう、これは一度回廊を使ってテストしています、既に要は筋力という段階ですから。伊勢さんは入院直後も足の制御は多少出来てましたし、後二週間はあるわけですし、ま、何とか」田口は、この後で伊勢の回復目標が家の中を動き回れるレベルに置いていたことも付け加えた。「それと本人の回復に向けた意志が強いです。なにせもっと訓練をきつくしてくれ、耐えて頑張るからと現状が軽すぎると言わんばかりに求めてくるんですから退院後も大丈夫です」
「野瀬先生の方は如何ですか」
「多少滑舌に影響は出ていますが、読み書きは正常、もともと趣味が小説を書くことだということで、各種判断力も問題ありません。ここの患者対応ルールの問題点を語らせたら立て板に水ですよ」と言って苦笑いをした。
「それは是非聞きたいですね」頭を掻きながらの田口の言葉に皆の頬が緩んだ。
「先生、立ち話も何ですから、奥の方で座りませんか、五つぐらい椅子ありますよ」師長が気を利かせた。仕切りカウンターの横を通る車椅子の患者もいるからだった。もちろん介助の看護師もだが彼らには守秘義務がある。
「そうだな」と田口はすぐに賛同した。
「仁科君、病室内での彼の自立度はどうだい？　現在の彼に対する院内ルールが全く無いものとして考えていいから」田口が腰かけるとすぐに担当の雅に確認して来た。バイタルサインの記録や看護師が打込む患者の状況はおおむね把握しているが、細部の自立度を知りたいのだろう。チーム医療の一環でもある。
　院内の制約抜きでというのは退院してからの伊勢を想定するのだから当然のことだろう。雅はこれで話しやすくはなった。それには訳がある。療養病棟の伊勢に対する転倒防止のための禁忌判断はもっとも厳しく固定されているが、伊勢は常に似合わず雅に強く抗議

したのだ。お互いに気心を知ったゆえだろうか、この件だけは遠慮もなかった。「なぜ歩かせてくれない、この部屋の中だけでもいい、それがだめならトイレに往復するときだけでもいい。君はこの前、もう自立歩行できますねと認めたよな」と。

以前から不満は聞いていたが、おとといの抗議はレベルが違った。

「うん、そう入力してスタッフに伝えたよ、主観的評価としてね」

話が先鋭化しそうだったのでタメグチで応じた。

「だけど何も変わらない」伊勢は鋭い目で返した。

話の中の「この前」という日、伊勢は雅の制止を押し切って「実際にその眼で確かめてくれ」と素足のままベッドから床に降り、トイレの前まで歩いて振り返った。雅はここに至って怜悧なプロの眼に戻し、きちんと診断しようという気になった。若干の迷いはある。許したとなれば、自分も職務上の懲戒を受ける恐れがあるからだ。しかしそうなら甘受しようと決めたのだ。伊勢はドアを開放し雅の視線を確認してゆっくり便座に腰を掛け放尿を済ませた。第三者が見たらきっと妙な構図だろう。伊勢は姿勢の安定を期してか慎重に立ち上がり、身繕いをしてからベッドへ戻った。杖も車椅子も使わず、手摺りにも壁にも身を預けずに「暴挙」は終わった。

伊勢はきっと、この件で退院処分になるとしても従うつもりだったのではないか。雅はなぜか彼の決意に殉じる気になった。それは自分自身が病院の対応に疑問を持っていたためかもしれない。

「さっきも言ったけど、変わらないのは私の主観的評価だからよ、特にわたしは患者さんの側に傾き過ぎているって看護師長から指導されている身だから。それともう一つ、伊勢さんのデータは転倒危険レベルが三だからだと思う」

「何だい、それ」と伊勢は目を剥いたが、内容を聞いて項目についてはうなずくしかなかった。六十九と高齢、聴力に難点、片麻痺中、筋力低下でリハビリ中、糖尿病で服薬中、排泄介助中。最後の一つが消えたとしても俄かに解除はできないだろう。ただ、それにしても納得できなかった。拘束を解かず身体活動の自由を奪う目的が転倒防止一つだからだ。

「健常者だって日常生活の中で転倒はするだろう」だからといって人間の自由を拘束する社会がどこにあるということらしい。

雅は、これには真顔で返した。

「ここの患者さんの転倒は健常者のそれとは違うの！　顔面強打、後頭部強打、手足の複雑骨折、肋骨のヒビ、どれ一つとってもロコモ障碍とか寝たきりとか、残りの人生を狂わせるのに十分なの。伊勢さんも麻痺から解放されるに必要なリハビリに大変な遅れが出ると思うけど」

「いま、遅れると言ったね」

「うん」と言った後でベッドサイドに置かれている時計をチラッと見た。時間が押していた、まだ定時の検診中なのだ。
「一日安静にしていると、高齢者の場合、どれくらい筋力が落ちるんだ？　君なら知ってるだろ」
　思わぬ方向からパンチが来た。一瞬たじろいだ。これに応えればこの論争は負ける。
「二パーセント落ちるって説がある」理学療法士の女性に聞いたことがある。
「じゃあ、二か月でゼロってことになる。その高齢者が失った筋力を元に戻すのにどれくらいの期間が要るわけ？　日常の回復が遅いのはどっちだろうね。いま現在でも筋肉の喪失感が凄いんだ、特にひだりはね。フニョフニョの脂になっているし、お尻の筋肉は一番の被害者ですでに皮膚が余って皺だらけになってる。遅れるっていうなら、こっちの回復の方が深刻だと思わないか」
　案の定、返せなくなった。病院の恐れる転倒は万一の場合だが伊勢の訴えは現実に負の部分が進行中なのだ。しかしなぜこうまで伊勢は自分に向かって攻めてくるのか。雅は論争を離れ感情の破綻に陥りそうな自分に戸惑いを覚え、ますます返答に困った。
「治療もリハビリも目的はその人の日常を戻してやることだろ？　そうなら患者の回復度に応じたきめ細かい対応をすべきで、少なくとも日常に近づこうとしている患者の邪魔をしちゃあ駄目だろ」
「伊勢さんはわたしたちが毎日忙殺されていることを目で見て知っていて、その上で個々の患者さんへの、より細かな対応を求めているんだ」声が沈んだ。この返しは甘えでしかない。
　別に伊勢は雅に、いや看護師だけに求めているのではないと頭では理解できる。しかし矛先が自分だけに向けられている。それが哀しくもあり、不思議なことに嬉しくもある。雅はとりあえずいまの、この場から逃げようと思った。
「もう行くね、この時間の作業終わってないから」
　そう言うと雅は、伊勢の顔を凝視しながらパソコン架台を後退りで引きながら廊下に出た。
　伊勢がいつもより硬い表情でこちらを見ていた。
「じゃ、またね、バイバイ」わざと幼児風な言葉で応じた。
　我に返ると田口医師が雅の応答を待っていた。
「平らな場所ではほとんど心配ありません。衣服の脱着も少し時間はかかりますがあらゆることを試行錯誤しながら一人で何とかこなしています、実際に見せてもらってもいます。結果で評価すれば既に自立です。階段の昇降は見たことが無いので、これは田口さん」
「うん、安全に昇り降りする基本を実地でやり始めたところ」
「福本さんの意見を聞きましょうか」田口医師がうなずいた後で看

護師長に総合評価を求めた。
「早期自立の願望と努力、最高度の積極性は認めざるを得ません、めったに出ない患者さんですね。でもそれが裏目に出て院内のルールに必ずしも従わないという一面が気になっています」
「福本さん、彼が退院して院外に出た後の危惧、障害に絞ってお願いします」と田口が顎を撫でながら言った。
　あの日の伊勢は早期回復を是が非でもと思う気持ちが強くて執拗な抗議をしていたのだ。きっと急ぎたい理由、病院には知られたくないわけがあるに違いない。救われる気がした。
「それでは私も反対はしません。退院後のリハビリについてのご指導を先生方にお願いするだけです」
「それにしてもなぜそんなに急ぐんですかね、まだ入院から二十日しか経っていないわけだから」田口は首を傾げた。
「経済的な理由じゃないですかねぇ、保険の対象外になる個室だし」と師長。
「人間関係をうまく構築できないタイプなのかな、だから大部屋は避けたとか」田口はまだよく解からないけどと付け加えた。
「若いナースだと難しい患者さんになるのかもしれないけど、嫌っているというわけじゃなくて敬遠してるって感じ？　伊勢さんに話を聞いてみると忙しいナースに手間をかけないように気を遣ってるようです」言語聴覚士は患者の相談役になることが多いという。野瀬の評価は「彼はやさしいオトナよ」だった。その野瀬に意見を振られた雅は、伊勢の気遣いについて大まかに語った。
「個室を選んだ理由については、伊勢さん曰く頻尿で同室の人に迷惑がかかるからということでした。確かに夜昼合計で二十回という日が最初の頃記録されましたね」
「このところの回数はデータで見てるけど十三回前後よね、でも高齢者は誰でも回数多いけどね」師長は違うと判断しているらしい。
「迷惑ということで言うと夜間の回数じゃないでしょうか、消灯時間内に五回なんてことがあるって言ってましたから」
「そうなると当人の性格とかマナー意識なのでアンタッチャブルだね」と田口はうなずいた。
「とにかく同室の人とうまくやれない人じゃありません。たぶんその反対に自分でできる範囲で人を助ける側に立つ人ですね。衣服の脱着など自立への執念も出来るだけ早くナースを呼ばなくてもいいようにとの配慮からです。ポータブルトイレで大きい方を排泄した後、トイレットペーパーで排泄物を隠し消臭スプレーをかける患者さんなんて見たこともありません。介助するたびにありがとうと口にしてくれる、これもまず珍しい。繰り返される自分一人でやれるという主張も、クレームと見るのは間違いだと思います。毎日のよ

うに通ってくる奥さんの表情を見ても伊勢さんの人となりをうかがい知ることが出来ます」雅の弁護は篤かった。

「はいはい、分かった。では許可する方向で動きます。福本さん、リハビリ病棟に移せる日、本人には明確な日付を言わないでください、個室の患者が退院する予定日を先送りすることがままあるので。リハビリ担当には病棟を変えてから十日ぐらいで来てしまう月末の退院に向けて転倒防止など帰宅後の生活の注意点を中心に訓練をお願いします。仁科君は車椅子を持ち込んで病室内を動けるようにしてやってください。その範囲でケアの方法と程度は任せます」

田口医師の結論でチームの話し合いは終わった。

「あと数日か」雅は、伊勢の部屋に足繁く通っても不審視されないお墨付きを貰った形になったのでホッと胸を撫で下ろした。伊勢はなぜか気になる患者だった。低所得者層に属する人だとは気づいているが、ただの老人とは思えなかった。あらゆる言動にはそうする理由がきちんと存在していた。論理が明快でもある。敵わない相手、そんな感じがする。何となくケンカ別れをした実父に似ているのだ。彼を理解することは父親を理解すること。もしかしたら自分は七十歳の実父恵庭浩との和解のきっかけを掴みたいのかもしれない。そんなことを思った。

病室のサッシ戸の向こう側は五階部分の屋上にあたり広々とした陸屋根になっていて、手前の手摺りのすぐ先を流れている雨水排水がつくりだす水溜りにしばしば野鳥がやってくる。白と黒のツートンカラーで鶺鴒の仲間なのか尻尾の振り方がダンスを想わせて可愛いので密かな楽しみにしていた。「今朝も独りだな、こいつ」つがいで来たのを見たことが無い。

あの日、ナース雅にぶつけた言葉の数々は、いい歳をして彼女への甘えでしかない。何かとても大切なものを失った。それだけは感じ取った。「もう来ないかもしれないな」そう思って改めて入口を見るとなぜかドアが完全には閉まっていない。閉めに行こうと反射的にベッドを降りて一歩踏み出し、ハッとして止まった。そんな自分が惨めに思え、顔を歪めて嘲笑った。「何をいまさら」と口に出し、床板を踵で叩くようにして歩き出した。ドアを閉め「ちっぽけな男になったな」と言葉にしたとたん目が潤んだ。

「たしかに伊勢さんは要注意人物になっているわよ、ここでは」

ショートカットの髪で、どちらかと言うと童顔の言語聴覚士野瀬昭子先生は、愚痴か病院批判か自己嫌悪か自分自身不明になっているこちらの話が終わると、何のためらいもなく言い切った。

伊勢は常に本音で患者に向き合ってくれる姿勢がお気に入りで、

急性期医療の一環として言語聴覚療法が早期に始まって以来、心のバリアーを取り去って本音で相対していた。
「脳神経外科の患者さんを預かっている病院としては院内の事故防止、言い換えれば患者さんの身の安全が最優先なのよ。ところがこのリスク回避のための目安、転倒転落の危険レベルが三で伊勢さんは最も高いと判定されている。そのあなたが」と言って相好を崩し、
「健常者に近いというか、多くの場合それ以上の判断力で相手の気持ちを忖度するし、更には独断専行をするタイプっていうわけ。しかもそれがルール違反だと百も承知で」
ここまで言われるともう笑うしかない。伊勢は野瀬に倣って笑顔になった。
「一応反省はしています」
「わたしはいいと思います、ルールを逸脱してしまうのも脳梗塞からくる病状の一つだと捉えるからです」
「そっちへいきますか」と少しく落胆した。肯定の言葉に全面否定の香りがするのだ。
「患者さんの言動には寛容にということです。むしろその動機や発言の内容に、病院側は真摯に対応すべきだと思っています。これからも伊勢さんが感じた不満や、チーム医療の現状などについての疑問点を堂々と発信してください。相手選びに困ったらわたしにぶつけてもらっても結構です」
「解かりました、これからは、ルールはルールとして守ります」
「守りながら改善を訴える、身をもって示すということですね、感謝します」
「参りました」本音だった。さすがに言葉の研究者だ、何か胸のつかえがとれたような気がした。一人でも理解者がいるのは嬉しい。
話がスムーズに進んだことから伊勢はちょっと聞きたいと思っていたことを口にしてみた。
「先生、いま私の担当看護師になっている仁科雅さんのことで、実は先日彼女に向かっていま伺ったリスク回避の行き過ぎに付き抗議をしてしまったんです。何だかあの日はつい不満が爆発してしまって、ま、甘えたんですね」
「ああ、その件ね。実はわたし相談されたんです、彼女の意見に賛成して看護師長にも伝えてます。彼女はあなたの疑問に胸を張って反論できなかったんです。彼女は明るくて利発、看護師を自分の天職だと信じて生きてきた子です。だから普段から疑問に思ってきたことを突き付けられて愕然としたのね、患者さんの身の安全第一、それがいつしか病院自体の身の安全に変質しているのではないかってね。伊勢さん、まっすぐな世代っていいわね」
野瀬は、まだ若い雅が、チーム医療の陰に管理型介護の弊がある

ことや介護には民事、刑事の裁判リスクがあることについて自省的に真摯な態度で悩んだことに瞠目するという。
「本来勝ち負けじゃないけど、心底負けたなってそう思います」
「リハビリ病棟に移ってからの伊勢さんにも期待しています。じゃあ今日はここまでにしましょう」
「あの、リハビリ専門の病棟に移るっていつからですか？」
「そうか、まだ伝わってないのね、正式には。日付はまだです、病室が空くのを待ってますので」
「今月末の退院を申請してるんですけど」
「そうならなおさらです。たとえ短期間でも、退院後のリハビリについてより具体的なリハビリ知識を身に着けてもらいませんと。ああちらは日曜日も実施しますよ、それに病棟スタッフ全員がリハビリ担当者のように動きます」
「なるほど分かりました。すみませんでした、個人的なことで時間を割いてしまって」
急性期のリハビリは各科二十分間と決まっている。
「いえ、充分職務の内容です。では、今日の締めに一つ教えてください、リハビリを含めての広い意味での考え方でいいんですが、介護って何でしょう」
「突然テストですか、一言で言ってということですか？」
「短くても長くても、伊勢さんの括り方でいいですから」
「する側、される側双方が堪えること」これに対する受け取り方は人によって区々でいいと思った。
「深いわね、人間の宿命みたいなものを感じます」
野瀬は笑顔を見せてうなずいた。

3

この日も帰宅が定時より遅れた。同僚の看護師が入れ代わり立ち代わり突然急用ができたからという理由で休むので大幅にシフトが乱れ始めたのだ。師長は頼みやすいのか雅に無理を押し付けてくることが多い。このところ疲労が溜まり気味になっている。
「汐里、ただいま」と声を掛けたが、いつものように玄関に飛び出してこない。
ダイニングの灯りが淡い。スイッチを全灯に切り替えると、椅子に座りテーブルに頬をつけて眠っていた。周囲に夕食を摂った形跡がない。夫の蒼汰が片づけてくれたらしい。起こさないようにしてリモート仕事部屋のドアを開けた。
「ウソ、居ないじゃない」
常夜灯状態で薄暗い中、パソコンが使われていない状態であるこ

とはすぐに分かった。当初は書類や専門雑誌が雑然と机上にあったのに、何も無かった。

何かあったに違いないが見当がつかない。とりあえず布団を敷いて寝ている汐里を運んだ。顔をよく見ると泣いた跡がある。

「ごめんね」と小声で謝った。

空腹だったが何かつくるという気力が出ない。冷蔵庫から缶ビールを出して汐里が座っていた椅子に腰かけた。

誰も大声で語りはしないが病院内の雰囲気も悪くなっている。発端はナースが一人新型のウイルスに感染していたのだ。ただし脳神経外科ではなく整形外科でのことだ。もっともどこの科に出ようがマスコミ報道では病院に感染者が出たとなるし、医師も看護師も患者との距離はかなり近い、ソーシャルディスタンスなど取りようがない。各科を横断的に訪れる職種さえあるのだ。まだある。回復期リハビリ病棟には脳神経外科の患者も整形外科の患者も入り、医師も往来するが、病棟は隣り合わせときている。雅のいるスタッフステーションのメンバーも全員が感染の有無を検査されている。

一缶ビールを飲み干した後、急激な睡魔に襲われた。いつ眠りに入ったかは定かでないが、頭に激しい痛みを感じて眼が覚めた。最初に見えたのは、顔を醜く大きく歪めた蒼汰だった。痛みは髪の毛を後ろに強く引かれたせいらしい。酒臭い息がまともに迫った。

「前にも警告したよなあ、雅！　これが家庭か？　主婦がしょっちゅう居ない、何時に帰るかも分からない、子どもはほったらかし、飯は無い、風呂は沸いてない、ありがたいことに朝めしだけはあると思っていたら当直でそれもございません？　これじゃあ独身の方がましだよ、ガキの世話が無いだけなあ！」

いつもではない。この頃だけなのだが弁解が何になる、ぐうの音も出なかった。

「今日は何、今度は酒浸りか、帰ってきたらすぐ家族のために何か作ろうとか、そういう発想すら無いわけだ」

眼を剥いたかと思うと顎をしゃくられ、返した手で空き缶を手にするとキッチンのシンクめがけて投げつけた。

これは毎朝の愚痴の類ではないと雅は気持ちを引き締めた。蒼汰がここまでの形相で荒れたことは無い。何があったのか。生まれたその問いが不用意な言葉に繋がった。

「いったい何があったの、いつもの蒼汰じゃない」

「ほう、俺のせいか、俺に何か悪いことがあったから立派なナースさまに文句を言ったと、こういうわけか？」

心配して言ったのだと言葉を返そうとしたそのとき、頬に強烈な痛みが走り、体のバランスを崩して椅子ごと床に倒れた。耳が熱くなって初めて殴られたことを自分の中ではっきりと確認した。

蒼汰の眼が左右に動き続けていた。力いっぱい殴ったことに狼狽をしている。雅はそう解釈をした。もう何も言うまい。そう決めてフラフラしながらも立ち上がった。
「ここのところ俺に仕事が来ない、指示が無い。たまりかねて今日電話した。ウイルスのせいで受注が少ないからだ、不満なら他社に移ってもいいぞと言いやがった。思った通りだ、何がリモートだ、体のいい辞職勧告だったんだよ！」
雅は黙って汐里を寝かせた部屋に移った。ドアをきつめに締めることだけは止めた。
翌朝、汐里との食事が終わった頃に蒼汰が起きてきた。
「何だ、もう済んだのか」とだるそうに椅子に座る。謝罪の声は無かった。自分が何をしたか忘れているのかもしれない。
「ちゃんと声は掛けましたよ。もうすぐ私は出掛けます。近くのコンビニで買っても出前を取ってもいいですから三度の食事は採ってくださいね」
「食欲がない」
「汐里はおなか空きますよ」
「そんなに気になるなら連れて行けよ、病院に」
「そうきましたか」唇を噛んだ。こんな男だったのか。その想いが、自分に対する苛立ちに繋がった。
「だいいちそんな顔でよく勤めに出られるな」
「犯人に言われたくは無いわね、今度手を出したら夫だろうが何だろうが刑事告訴しますからそのおつもりで」本音だった。辞職勧告が出たからと言って人格が崩壊するような弱いことでどうするのか。責めるなら会社から重要視されていない自分だろうに。雅はざわつく胸を抑えていつもの自分に戻そうとしていた。
「汐里、パパの言うことをよく聞いてね、今日は五時に帰れるからね」自分の中でだけ、何事もなければと付け加えた。
「うん、静かにしてる」
汐里の眼が蒼汰の方を見ようとしていなかった、一度も。あれほど蒼汰を慕っていた子が何か怯えているように感じた。「まさか汐里にも暴力を？」雅の中で大きな変化が起ろうとしている。
ところが多忙の雅の知らないうちに家族の信頼感の変化だけではなく少しずつ身の周りに異変が生じ始めていた。
この日の午後五時に師長の残業要請を振り切って約束通りに帰宅してみると、汐里がキッチンの床に座って泣いていた。
「ママ、おなか空いた」
「三井のおばちゃんは？　お昼ご飯作ってくれたでしょ」
派遣家政婦が通って来ているはずなのだ。
「ううん、来てないよ、おばちゃん」

聞くやいなや雅は蒼汰の「仕事場」のドアに飛びつき、「颯太！　何したの」と勢いよく開けた。パソコンは閉じられたまま、少し開いたサッシ窓から入る風が木の葉模様のカーテンを揺らしていた。
「汐里、パパはいつから居ないの？」
「バスで帰ってきたらいなかった」
「かわいそうに。待ってなさい、ホットケーキ、とりあえず作るから」即席のホットケーキの素が二箱あったはずだ。
遅めのおやつのような感じで作りたてを与えてから、「家電」の受話器を取った。
「え？　うちが、仁科が解約するって電話したんですか？」
何をかいわんや。蒼汰は事実上の解雇を確認してすぐに家政婦を切ってしまっていた。もちろん初耳だった。
「もう家族でも何でもないじゃない、これじゃあ」受話器を手にしたまましばらくの間呆然としていた。
「ママはたべないの？」
「食べる、食べる」雅も若干空腹だった。
「何でメガネしてるの？」
椅子に座って食べようとすると汐里が小首をかしげた。いつもはコンタクトレンズなので汐里には奇異に映ったらしい。
「マスクしたままたべるの？」今度はニコッと笑った。
マスクと眼鏡を外しながら少し反省をした。常になく心が乱れていると。「どんな局面でも冷静に」看護師長の口癖を思いだした。この程度のことで取り乱していては蒼汰といい勝負になってしまう。
「ちょっとミヤちゃん、どうしたの？　その顔では患者さんの前に出られませんよ」
今朝出勤した際の福本師長の第一声は手厳しいものだったが、さすがに叱責の口調ではなく、眼窩左の皮下出血痕と腫れた唇の左側を優しく触れながらのことだった。すぐに内線電話をかけ始めたので上司に言いつけるのかと思いきや、やり取りを聞いていると相手は眼科の医師らしい。
「ミヤちゃん、すぐに着替えて、あなた万一に備えて常時眼鏡も持っていたわね、コンタクト外して交換しなさい、それにマスクを着けたら患者さんに接触してもびっくりさせないで済むから。その後すぐ眼科の井筒先生のところへ飛んで行って。精密検査するっておっしゃってるから。いいわね、あなたがだめになったらわたしも途方に暮れるのよ、子持ちのナースが次々に休むんだもの。何でも保育園、幼稚園で来ないでくださいって拒否され始めたらしいわ、もう、たった一人感染者が出てもこれなんだから。さらに家庭内暴力かさぁ、参るわね」
ＤＶだと感づいたのはさすがに早い。雅にしてみれば理由付けと

して夫の負の行為を言い募らなくても済むので有難い。
子持ちのナースはかなり経験を積んだ人が多く病院の最前線で動いている。三十一の雅などはまだ中堅の端に位置しているに過ぎない。「来ないでください」は他人事ではない。汐里を見てくれている私立の『木の葉幼稚園』が例外だという保障は無いのだ。どこでも誰でも法人でも個人でも身の安全を図るのは、本能なのだから。
「汐里、夜はカレーでいいかな？」
「うん、大好き」
レトルトではなく料理してみよう。こんなときは体を動かした方がいい。頭も働く。そう思った。
この日蒼汰は十二時を過ぎても帰ってこなかった。
翌朝、少し遅刻する旨病院に連絡をして汐里を幼稚園に運んだ。
正面玄関に立ったところで園長が中廊下を小走りして近寄ってくると「仁科さん、ごめん。しばらく汐里ちゃんもご家族も来ないでいただきたいの。幼児たちを預かるうちとしては大勢の親御さんの抗議や要請に逆らえないのよ」
「わたし直近の検査でも陰性ですけど、それでも？」
ナースである以上理由は理解できるが、あと二、三日は通園を認めて欲しかった。準備が整っていないのだ。
「そうだとしても、いつ感染するか分からないんでしょ？　しかも症状が出ない間でも感染させるおそれがある。テレビで見聞きして皆さん知っているのよ、だから」
園長の眼が、病院勤めなら当然ご存知でしょ？　と念押しをしている。反論は出来なかった、だいいち自分自身、感染を恐れているではないか。
「解かりました」
「雅さんには何度か園児の異状に気づいてもらったりしてお世話になっているんですけど、ほんとに、ごめんなさい」
「汐里、しばらくの間幼稚園お休みになるよ、行こう」
園長が外まで送ってくれたうえ、頭を下げてくれた。
雅は近くの児童公園前のスペースに車を停めると、汐里をブランコで遊ばせながらケータイで福本師長に連絡をとった。
師長は雅の訴えを聞いたあとで同情し、顔の怪我のこともあるのでそちらの理由付けで欠勤を許可しておきますと応じてくれた。猶予は二日間だった。
「あ。かあさん、これから車でそっちへ行くからでかけないで待ってて。父さんは碁会所？　実は緊急に汐里を預かって欲しいのよ」
父浩とケンカ別れをしたままだが、ことは孫の緊急事態だ、よもや叩き出しはすまい。雅に他の手立てはなかった。結局詳細に蒼汰の変貌を語り、病院の事情も語ることになった。

「だから結婚に反対したのよ、父さんは。彼の中に何か危険なもの、お前を不幸にする種を見出したから強硬にね、わたしには解かる。汐里を預かるのはいいわよ、近くまで来たら電話しなさい、汐里を迎えに行くから。だけど雅、おまえは今回父さんに会わない事。意地の張り合いで預かれなくて可哀そうになるのは汐里だからね。いいね、事情は私からゆっくり話すから」
「ありがとう、かあさん。車だから一時間半で着く」
「本当に感染してないんだろうね、私たちは高齢者だから罹ったら最期も覚悟の身だよ」
「さきおとといの二回目の検査でも陰性、病院の感染者は他の職域の人だったし」
「信じるよ、じゃあね」
通話が終わると、潤んでいた眼から涙が落ちた。結局結婚に反対し続けた父親に対して意地を貫き通せなかったことになる。子持ちでなければ選択しなかったろうが、汐里の為には屈服せざるを得ない。
「汐里、バアバの所へ行くよ、おいで」
「ママ、汐里にバアバいたんだ、うれしいな」
そう言えば今日が初対面になるわけだ。雅は複雑な想いに囚われた。父親との件、自分は正しかったのだろうかと。

病院の若い女性のアナウンスが廊下から響いてきた。伊勢は完全には聞き取れなかったが、見舞いに来ている幸子から聞いたばかりなので何とか理解できた。
「まだ面会制限なので通してもらえたわけか」
面会目的の来院者は入り口が別にあり、いつもの申込書提出のほか体温測定を経てから許可されるという。近親者の面会のみが許可され、一般の面会者は病棟内に入れなくなったのだ。
「二人目の陽性者が出たら面会謝絶だって言われた、病院の中にも入れなくなるって」
病院としては当然の処置だ。外から面会者を通してウイルスは入れたくないし、感染していない面会者に院内で感染させてはなおいけない。幸いにして、昨日までのところ陽性者はまだ一人しか出ていないらしい。しかし、院内に居る全員の検査が行われたわけではないのだ。リスクは続いている。
「禁止になったらもう来られないから、明日着替えとか必需品をたくさん持ってくるわ」
「ありがと、あと少しの間だ。院内に洗濯施設があるにはある。ただし自立判定がもらえればという話だ」
「結構動けるのにね、左手は別として」

「室内の動きだけは事実上制限を緩和してくれたけどね、たぶん今月いっぱいで退院なのでそれなりの準備をさせるためだろう。ナース雅が車椅子を持ち込んできたのもそれだ。たぶん自立判定は退院日まで出ないと思う。自分で洗えないのは不便だな」
「ねえ、いまの不便で言いやすくなったんだけど」
幸子は次の言葉を口にするまで少し間を置いた。
「何だよ、悪いことでも起こったのか？」
「退院したら戻ってきて再婚しない？」
「散々話し合っただろ？　お前の生活保護申請のためには…」
「井口さんから通知が来たの、今月末で立ち退いてくれって、売却先が急いでるからって」
井口は無料で廃屋を貸してくれるように家主に交渉してくれた不動産屋だ。念書には確かに、解約には無条件で応じる旨したためている。だから無料なのだった。
「結局、正味一か月の仮住まいってことか」
「再婚しないで戻れば、役所を騙して生活保護を受けたことになるでしょ、それはあなただって嫌でしょ」
「再婚すれば、こういうことになりましたのでと正直に役所に伝えれば保護を失って真正直な二人、か。なるほど」
「お金はギリギリだけど元の暮しに戻しましょうよ」
幸子が返事を急かすように伊勢の肩を揺すった。
考えるまでもなく、いや、躊躇うという贅沢も許されず他に採れる手段は見つからない。個室入院によって僅かな蓄えがさらに減っていく。いくら請求が来るか不明だが丸一カ月分になる退院時精算も迫っているのだ。幸子の対策は極めて真っ当なもののように見える。この先にあるのは「恥も外聞もない世界」そう想えた。
「少ないけど引っ越し荷物はどうする」
外出届が許可されればいいが、それでも片手で片付、搬出など出来るわけがない。つまり大して自分は役には立たない。
「井口さんの話だとあの家すぐに解体するんですって買主が。身の回りの手荷物と布団だけ、タクシーのトランク利用で何回か往復して運ぶから。あとはそのまま残していいかと井口さんに頼んでみる」
明るく前向きに話す幸子に、伊勢は胸が詰まる想いがした。
「伊勢さーん」の声に入口を見ると看護師長が立っていた。
「ちょうど奥さんも一緒だ、良かった。明後日の午前十一時にリハビリ病棟に移ってもらいます。四人部屋ですが現在は一人、伊勢さんが入っても二人だけの部屋になります。個室は結局今月いっぱい空きません、ごめんなさいね、十日間だけだから勘弁して」
「はい、構いません。お世話様です」
幸子が真っ先に返事をした。伊勢もうなずくしかない。

「その時間にできれば奥さんも」
「ええ、まだ面会謝絶じゃないですよね、当日」
「また一人陽性者が出ちゃったので検討中です、たぶん準備があるので来週あたりそうなると思います。そうなったとしても月末の退院日には来てください、受付に話は通しておきますから」
「はい、承知しました」
「あの、移る前に看護担当の雅さんにご挨拶したいんですが、今日もお休みか何かですか」伊勢は病棟が変れば看護態勢が一変すると、言語聴覚士の先生から聞いている。
「仁科は明日出てきます、有休でした」
この人手不足に陥っている院内のことを思えば有休はあり得ない。何か事情があったに違いないと伊勢は踏んでいた。とにかくお礼は言いたかった。
「あの、婦長さん、退院のとき会計しますよね、金額が確定するのはいつになりますか、用意する都合がありますので」
さすがに幸子は現実的な視点で先を捉えている。伊勢は何だか自分がバカに思えてきた。
「退院の三日前には出るはずですからお知らせします」
師長は笑顔で幸子にうなずくと入口のドアを静かに閉めた。

実家の最寄り駅の前で汐里を母親に預けた後、雅がまっすぐに所轄の市役所に向かい離婚届の用紙を手にして自宅に戻ると入口のドアが施錠されていなかった。蒼汰が中に居る。暴力を受ける覚悟が要る。そう思ったが胸を張って入った。
上半身裸で腰にバスタオルを巻いた蒼汰がキッチンのテーブルで何か書いている。「冬なのにバカか」と心の中で罵った。こちらを一瞥したがすぐに手書きを続けた。何と離婚届だった。暖房がきつい。とりあえず上着を脱いだ。お互いに「どこに行ってた」と訊かない。いまこのときの二人の関係性を物語っていると言える。
「これで協議離婚成立ってわけね」
雅は取って来た離婚用紙を出して蒼汰に見せた。
「汐里の親権も監護権も雅でいいよな。どうせその気だろ？」
「扶養料も求めるな、ですか？　念書も欲しがりそうね」
「さすが回転が速い、鈍くて出来の悪い俺には不向きだ」
上目遣いでそう言うと用紙を回転させて雅に向けて寄越した。証人欄も埋まっていた。男女二人の名前も初めての印象だ。
「ずいぶん手際がいいこと」
ひとつ皮肉を飛ばしてから自分のペンを走らせた。蒼汰が立って隣室に下がった。無防備に後ろを見せる形になったが、この期に及んで素面で背後から襲い掛かる度胸は無いだろうと踏んだ。

書き終わって書面を確認していると戻って来た蒼汰がA四判程度の紙をテーブル上に滑らせた。
『ウイルス一家出ていけ！』と大きくて乱暴な字が踊っている。
「病院勤めを家族に持つと悲惨だな、ゲス野郎どもの餌食だ」
「この字の横に追い出したから安心しろ、とでも書いて貼ったら？」
「ああ、そうしよう」
「この届すぐに提出して戻ってきて、戸籍課で受理証明もらってきてね、すぐに出て行って自由気儘な独身者にしてあげるから」
「身一つで出て行けよ、残った俺が困るから」
「思い出に興味はないわ。次の人はナースでないと思うから安心だわね」
「頭や顔のいい女は冷たいって本当だな」
「大人しく見える男は却って危ないって忠告、当たったわ」
「前の男にか？　よく言うよ」
「結婚に反対していた父にだよ、勘繰るな。早くそれ、出しに行って！　最低限持って行くもの整理しておくから」
これには返しが無かった、着替え始めたのが返事らしい。語るに落ちていれば世話はない。このところの蒼汰の外泊は全て女の所だろう。解りやすい男だと、ため息をついた。
明日から勤務だ。休んだカタキは仕事で返ってくる。長時間勤務できる態勢で喜びそうな師長に言って連日宿舎併設の仮眠室に居ようと思った。年度末には退職しなくてはならない生活環境になってもいる。あと一と月ちょっとだ。汐里のことも、父のことも、あれこれあるが、いまは仕事に逃げたい自分がいた。追い詰められている自分の心の為にも。
「こんなに簡単なの？　夫婦って、親子って一体何なの？」
蒼汰が出掛けた後で雅は、頬杖をついて目を瞑った。

雅は朝出勤してから顔を合わせた同僚には誰かれ無しに連休させてくれたお礼と迷惑をかけたお詫びをしていった。本当はそこまでする必要はないのだろうが、返事すら返ってこないところを見ると同僚たちもかなり疲弊しているのが判る。だからだ。いつもの笑顔はなく、休んだことへの羨望半分の突っ込みもない。師長によれば脳神経外科、同内科のナースだけでも五人、一週間以上出て来ていないという。しかも全員が子持ち、その中の二人から家族の反対に因る退職願が出ているとか。感染者を出した他の職場の雰囲気は推して知るべしというところだ。
唇の腫れはひいたものの、まだ目の縁の変色は目立つ。全治二週間との所見だったので納得はしている。特別に担当している患者の検診に回っていると福本師長が寄って来た。

「ミヤちゃん、期間一か月限定の仮眠室一室の専用許可は下りたから安心して。気の毒で言葉も無いわ。まあ、仕事に集中して忘れなさい、嫌なことは」とまた肩に触れた。これの後には頼みごとが来るのが師長の定石だ。

「定時でいったん休んで夜中の十二時から翌朝まで救急室をヘルプしてくれない？　筧先生の御指名なのよ。もちろん彼のことだから瀕死の患者のヘルプに声は掛けないわ、そこは先生、心得ている」

それでも現場に入れば常の配慮など吹き飛ぶ。いつものことで、「わたし、できません」などというのどかな辞退など不可能だ。

「分かりました、頑張ってみます」

「ありがとう、助かるわ。休憩中は完全にフリーでいいわよ」

満面の笑みが怖い。それでも、無理を強いられたと考えずに配慮してくれたと受け取ることにした。だいいち、このところ無理ばかり頼んでその都度許してもらっているのは自分の方なのだ。

午後六時に部屋に来た制服の違うナースが夕食の器類を引き下げに来た後、一時間以上の間を空けて夜の定期検診のナースが来るのが通例だった。ナース雅は丸二日以上顔を見せていない。伊勢は「いったい何があったのだろう」と気になって仕方がなかった。

数人の男女看護師が交替で来てくれているが、その中の一人でも隠れた陽性者がいれば自分は感染する可能性が高い。看護師は医師以上に患者との身体的距離が近いのだ。若い人は感染当初自覚症状が無いらしいので一斉検診でもなければ感染していても判らず職務を続けるだろうから怖いと言えば怖い。万一感染すれば、年齢、持病、既往症など、公表されている重症化しやすい項目の全て該当する関係上死亡する確率も高い。ここまで考えて改めて医療関係者が或る種自己犠牲の中で職務を全うしていることに敬意を感じた。逆に患者から医療関係者への感染の方が確率は高いからだ。それと同時に幸子に言い遺しておきたいことがあるのに気づいた。遺産など皆無に等しいので内容は感謝の言葉に尽きる。売店で便箋の類を購入して認めておこうと思った。

自動的に閉まるタイプの入り口のドアが開く音がしたが、定期検診が早まったのだろうとベッドに横たわったままでいた。目隠しカーテンを引いていたので誰が入って来たのかは分からない。

「伊勢さん、変わりない？」と顔をのぞかせたのは制服姿の雅だった。いつもどおりにベッドサイドに近づいてくる。

「うん、大丈夫。それより何かあったの？」

伊勢は一般的な質問の感じで口にしたのだが、いろいろあり過ぎた雅にはストレートな問いかけと同じことになり、プロとしてあってはならないことだが、つい沈んだ顔になった。

「眼鏡の向こう内出血だよね、この前立ち入ってはいけないと思って聞かなかったけど、普通に見て殴られた痕だよ，可哀想に。誰だい？　相手のバカ野郎は。まさか患者とか、いや、上司か」
「元夫よ」雅は無防備に応えた。
「元って何？」
「離婚したの。離婚ほやほや、そんな言葉無かったっけ」
笑いながら眼が潤んでくる。雅はそんな自分に戸惑った。いけない、甘えようとしている。自制は意識しつつも、追い詰められ凍え切った心は温かさを求めていた。涙が溢れる。見せたくない。その想いが俯かせ、そのままでベッドの上で座っている伊勢に倒れ込んだ。額が伊勢の胸に当たっている。眼鏡に涙が溜まり始めた。両手で伊勢の肩を掴み嗚咽を繰り返している自分がいた。うろたえたもう一人の自分がカタルシスなら仕方がないとうなずいた。伊勢の右手が髪の毛を優しく撫ぜてくれている。言葉が無いことにも救われた。時間にすれば決して長くはない。それでも二人の間に温かいものが通い合ったような気がした。

市役所に離婚届を出しに行った蒼汰はあろうことか女を連れて帰って来た。蒼汰より先にダイニングに入って来た女は雅に向かって薄ら笑いを浮かべると「颯太ぁ、なかなかいいわね、ここ。いつから来ようか」と声高に言った。
雅は凛として背筋を伸ばして女を見詰めた。若くはない、四十絡みか、胸元を大きく開けタイトなミニスカートでヒップラインを際立たせている。若干無理がある。そう思った。
蒼汰が寄ってきて、「ほらよ」と受理証明を鼻先に突きつけた。
受け取って確認をしている間に蒼汰は、冷蔵庫を開けて缶ビールを取り出し立ち飲みを始め、女がそれに倣うように冷蔵庫を開けた。
「これから車で彼女を送ろうとしてる人が飲酒ですか」
雅は蒼汰ではなく女の方を見ながら皮肉った。
「別に美鈴を送る必要もないさ、お前が出て行けば。だから二人して飲んでる。賢い雅さんなら解かりそうなもんだ」
確かにと微笑んで、立った。キャリーバッグは玄関近くに置いてある。感情は露わにすまいと思った。むしろ非難は蒼汰の人間性を見抜けなかった自分に向けたかった。せめてもの矜持だ。母は言った、父は彼の隠れた危険性を察知して結婚に反対したのだと。
「ちょっとあんたさぁ、ほんとに正規の看護婦なの？　董仙病院に入院したことがある客に聞いたんだけど、男の患者の身体を洗ってやったり、うんこやおしっこの始末までしてやるんだってね、それって看護婦のすること？　介護役のおばさんじゃん」
「なぁ、俺も美鈴から聞いてびっくりしたよ、保育園でさんざん誉

め言葉聞いてたのにガッカリだ」
　これが蒼汰の報復か、この無知無理解が腹立たしくも哀しくもあった。何も言うまい、言葉がもったいない。そう思って外に出た。

　ハッとして顔を上げると伊勢の姿が霞んで見えない。
「これでレンズを拭きな」と伊勢がベッドサイドのテッシュを取ってくれた。軟らかい笑みが催促をしている。
　雅は眼鏡を外して「拭いて」と呟いた。まるで父親に甘えているような、自然な流れになった。
「直接見るとまだ傷痕が濃いね、口惜しかったろうな、きっと」
　利き手一つで丁寧にレンズを綺麗にしてくれている伊勢の姿に、この人に対する自分の感情はいったい何なのだろうと雅は、自分の心の中を探ろうとしていた。恋とは違う、それだけは判った。
「そうそう、リハビリ病棟に移る前に、入院してからの解らなかったことを訊いておきたいんだ。もうこことの交流は原則無くなるって聞いたから」
　ナースと患者の関係に戻そうとしてくれている。恥ずかしいほど感情をぶつけて甘えてきたことは忘れてあげるよとの配慮だ。大きく包み込むような優しさ。クリアになった眼鏡を受け取りながら雅はそう思った。
「私に分ることかな？　どうかな？」
　このまま「こども」でいたいのでタメグチ風の言葉遣いを続けようと思った。それに定時勤務は終わっている。師長が言った通りの「フリー」なのだ。
「退院が迫って来たので今までに作成された書類がたくさん下りてきたんだけど、まず入院診療計画書にあった病名でね、アテローム血栓性脳梗塞とあるけどアテロームが何のことやら」
「脳梗塞には心原性とかラクナとかアテローム血栓性とかいろいろ種別があるんだけど一番多いのが伊勢さんの罹ったやつね。これにも原因によって細かい区別があるの、伊勢さんの場合はコレステロールが血管の壁に堆積しておかゆみたいな塊ができた、これがアテローム。その塊の膜が破れてそこに修復目的で血小板が集まり血管をより狭くしてしまい、そこに血栓ができて血管が詰まってしまった。で、血流が血栓から先の方に行かなくなった範囲の脳細胞が壊死したわけ。右脳で起こったので左半身が麻痺。つまり片麻痺になった。うまく言えないけどこんな感じでいいかな」
「流れている血がドロドロに濃くなって細くなった血管に塊が詰まるだけかと思っていたから意外だね、コレステロールが関与しているとはねぇ」
「伊勢さん、大きな点滴袋二つで参ったと言ってたあの後で病室に

専門の先生が出向いてエコーで頸動脈の検査をしたでしょ、伊勢さんのアテローム血栓性脳梗塞は中大脳動脈で起こったことは救急搬入後の検査ですぐ分かっていたんだけど、念のため太い動脈の状態を確認したんだと思う」
「それ、結果を知らされていない」
「問題なし、だったのよ、年齢の割には綺麗だったみたい」
「是非聞きたいって感じじゃないけど、いま処方されてる薬は何と何？　名前なんて聞いても覚えられないけど、何のためかは知っておきたい」
「そうかぁ、それも説明なしなの？」
「少し前にまとめて診療明細書が来たけど薬品名が専門名称で羅列されていて、患者に理解させる目的に出たものじゃないね、プロからプロへの伝達レポート、そんな感じ」
「そう言われてみれば…確かに。処方目的は脳梗塞の再発防止。血栓を防ぎ血流を円滑にする、血圧を下げる、コレステロールをコントロールする、血糖値を下げる、最後に胃腸を整える。これで五錠になったの、もちろんこのほかにも少しの間増やしたことも」
「了解。それにしてもなぜ何も解説無しなんだろう。いいから病院の、医者の言う通りにしてれば間違いない、そういうことかな？」
「うーん、インフォームドコンセントの趣旨からしても伊勢さんの疑問はもっともね、ただ脳神経関係部署の特殊性もあるかな。とりあえず救急医療では説明も同意も患者さん本人には期待できないので家族に対して実行してる形。病院としては適切対応済みになるわけ。その後も多くの場合、意識が無いとか、理解力、判断力に乏しい状態が続く。個別的に評価して対応をきめ細かくする、いつの間にかその姿勢が薄らいでしまったのかもしれない。以前伊勢さんに問題提起された身体抑制とリハビリの関係に繋がる落とし穴…」
　伊勢は「しまった」と頭を掻いた。また目の前の子を追い詰め始めたと。ナース雅個人の問題ではないのに。
「雅、ごめん。また君を責めちゃった」つい、うっかりと下の名前で呼び捨ててしまい、内心慌てた。
　雅は微笑しながら首を振った。いまは伊勢の娘扱いが嬉しい。
「これで終わりにするからもう一つ。自分が辱められたようで気になって仕方が無いんだ。リハビリが進み始めた頃だ。男の看護師がベッドのヘッドボードの後ろに何か箱のような機器を取り付けたんだ。もちろん何の説明もなく。それ以後ベッド上を移動するたびにというか、マットが大揺れするたびにナースコールをしたと同じように、スピーカーからどうしました？と男性の声。ただ動いただけですよ、コールした覚えはありませんと応える。いったい何度繰り返されたことか。夜眠るにも、寝返りを打つにも神経を使う羽目に

なった。夜も昼もだ、ついに切れてね、これは何なんだって抗議して翌日撤去してもらった」

腕組みをして聞いていた雅は「撤去の際も説明なし？」と訊いた。

「万一のことが無いよう伊勢さんを護るためと言って出て行った、それもやや不満げにね」

「離床センサね、それ。事前の相談はなかったわ。患者さんが一人でベッドから下りたりして転倒しないように。或いはベッドから床に落ちて元に戻れないなどコールすらできない状況にならないように、体はそこまで重度の症状でないにしても認知機能が低下していてベッドから離れたままなかなか帰ってこないときなど異状が予想され現場にいち早く駆け付けられるように」

ジッと聞いていた伊勢はたまりかねて笑い出した。トイレまで独りで歩かせてくれと頼んでいたころの話だからだ。

「ありがと。要するに監視されたわけだ。さすがに要注意人物」

「そのようね」と雅もクスクスと笑い出した。「最重要人物だと思って堪えてください」

「過ぎたことだし、いいさ。いろいろスッキリした」

「ずいぶん傷ついたでしょうね」

「いやぁ、感謝九割、疑問不満の類は一割、ちゃんと有難いと思ってるよ、とくに雅にはね。病棟変わるからお別れだね」

「わたし、あっちこっち派遣されるタイプだからまた会うかもよ」

「あと十日ないよ、退院まで。まだ移るメリットあるのかな」

「その十日間、みっちりリハビリ運動させるって、溝口先生が田口さんに頼んでた、特につまずかない歩き方と階段の降り方」

「うん、頑張る、手指は長引くとしても足は当面最重要になる」

「じゃ、行くね、今日十二時から徹夜で救急室ヘルプなの」

「大丈夫？　あそこ殺人的に忙しそうだけど」

「大先輩が多くて、たいして役立てないと思うけど精一杯やるわ」

「その顔の傷が消えると嫌な思い出も消える。そう思い込みな」

「うん、そうする」

そう言うと雅は数歩後退りをしてから真っ直ぐにドアに向かった。嬉しいことに「さよなら」の言葉は無かった。

私立董仙病院が新型ウイルス感染対策のために全病棟面会禁止の措置を採ったことは地元新聞の一面で報じられた。地区全体の感染者数はまだ五人だがその内の三人が院内感染、大量発生源クラスターになる可能性は捨てきれないとも。

伊勢の一人息子信人が婿に入った篠田家は東京五輪の頃に先代が開業した居酒屋『ののさま』の暖簾を護りつづけていたが、ここにきて廃業の危機に面していた。感染対策をしていても感染への警

戒感が強く人の往来そのものがほとんど無くなったからだ。とくに稼ぎ時に当たる夜間が酷い。パート店員を緊急解雇して経費は減らせても収入そのものが無いという事態は一向に変わらない。この地区の感染は始まったばかりだが、収束の見通しどころか感染拡大の波はこれから押し寄せてくるとの警告通知も来た。

店の奥座敷で手紙を書いている信人に女将でもある亜矢が声を荒げた。

「何してんのよ、そんなところで。ハローワークに行って稼ぎ口を探してって朝から何度も言ってるだろ」

「待てよ、親父に手紙書いてからだ。お前がぐずぐず言うから見舞も出来ないうちに面会禁止になったんだ。これで院内感染でもすれば高齢者だから万一のこともある。死んだりしたら火葬が済むまで顔さえ見れないんだぞ」

信人は傍らに置いていた新聞を亜矢に向けて滑らせた。

「親だ、親父だってバカじゃないの？　役に立つ地位や名誉があるわけでもないし、死んだって遺産もない、無いどころが返してない借金があったりしてね、入院費だって払えるかどうかってレベルなんだろ」

「その通りだよ、今はな。だけどあの大変な時代に頑張って高校、大学と自由に通わせてくれたんだ。命の心配をするくらい人間として当たり前だろ？　違うか」

「その学歴とやらが何の役に立ってるのさ。いまはね、この店の命がかかってるんだよ、今月と来月の支払い分が二十万、それと食っていくお金！　仕入れの滞りだって十万も足りないんだ。いうほど甘くていい親なら無心に行ってきな、病院は入れなくても母親は市内に居るんだから、手紙なんて無視されれば終わりじゃないか」

事実家計は逼迫していたが、そこまで言うかと大人しく構えていた信人もさすがに頭に血が上ってきた。

「うるせえな、金、金、金っていい加減にしろよ。自分の親に対する憎しみを誰彼無しにぶつけて憂さ晴らしするな、悪い癖だ」

「ふん、偉そうに」

「どっちが？　人のことよりお前こそ営業自粛に向けた公的支援を受ける手続き済んだのか？　それこそ大事な金のことだぞ」

「あ。まだ途中だ」と亜矢は慌てて座敷を出て行った。

「あいつもあんなじゃなかったんだけどなぁ、何で惚れたんだっけ」

信人はブツブツ言いながらも便箋一枚を字で埋めきった。

確かに父に限らず父母共に金だけを見れば交流を続けるメリットはほとんど無いだろう。亜矢の言う通りだ。正直なところ、続けるなどと世間並みのことは言えない。亜矢との結婚以来往来は皆無になった。父母の初孫にあたる娘の南帆(なほ)は六歳、今年の四月に

小学生になるというのに、まだ一度も二人に会わせていないのだからかなり酷い関係になっている。
「それなのに…俺も恥知らずだな」と自嘲した。
手紙に書いていたのは、見舞いの言葉と二十万円の無心だった。
信人の両親である伊勢雅志と幸子は年金生活で収入は高が知れているが、こういう全国的な疫病不況になってみると低レベルながら収入が安定しているのが強みだ。独立営業とか店持ちなどと聞こえはいいが、いざとなると無職無収入階層と同じになってしまう。三十六歳にもなって老父母に無心とは無様だと思うが、形振り構わずの姿勢が求められていた。
「ほんとに、どうなるんだろう」
信人のため息は深かった。

療養病棟からリハビリテーション病棟への移動日の朝、伊勢はベッドから車椅子に移乗し、わざわざ部屋を半周してからサッシ戸の前に停めた。ナース雅が車椅子を持ち込んできたときは、短時日での操作習得は難しいと思っていたが、雅が車椅子の足置き、フットレストの右足側のサイドプロテクタを目の前で外し、制動コントロールや狭い場所での方向転換を容易にしてくれたおかげでかなり上達することが出来た。
自分の手でカーテンを開ける、それだけのことで数日前までの行動抑制を思うと小さな昂奮が生まれてくる。
淡い水色に極上の墨を水面に落としたような雲の広がりの最も遠いところが山の稜線と出合う。その辺りが少しずつ赤みを帯びてくるのが何ともいえず綺麗だ。空だけはもう冬ではなく春だ、透き通るような青もいいが、今朝の落ち着いた感じの色もいい。入院して初めてとなる七時間の睡眠がとれた。二十日以上続いた睡眠三時間台というもう一つの障碍、重度の不眠病になったかと疑っていたのだ。「よく身体がもったな」とつぶやき、スーッと大きく深呼吸をしてみた。
この日目覚めてから精神的な曇りガラスを取り去り若い男女の看護師たちの言葉を拾い集めている自分がいる。こちらの受け取り方ひとつで彼らの仕事に対する爽やかな使命感が伝わってくる。いまだから解かる。
「自分で出来ると思ってもやらない、動かない！　出来る人には辛いでしょうが守ってください」
患者が独断でやって生じた事故でも院内であれば自己責任論で片付かない。
「忙しいだろうからって気遣いは要らないの、ちゃんと真夜中でもコールしてね」

患者の善意の忖度も完全看護の視点からは邪魔になってしまう。
「早く着せてあげたいけどここで視てる。ゆっくりでいいよ」
一見優しく見える介助が時として患者の自立を遅らせることがあるからだろう。雅はこの介護の鉄則を「手を出すな、ただし傍に居ろ」というのだと教えてくれた。
「何でうんこの始末を看護師がするのかってそんなに疑問？　だって排泄物って医療のための情報源でもあるんだよ、異状があったら先生に報告するの。あはっ、嘘だと思ったら溝口先生のスマホ見せてもらって。うんこ写真が六種類ぐらい並んでるから」
それをマナーのつもりでトイレットペーパーで覆って消臭までしては体調判断が出来なくなる。
「エッチで見てるって思わないでね、患者さんが立って尿瓶使ってるときって転倒しやすいんだ」
患者が性的な意識をすると看護師も日常的なマナーの世界に引き戻されてしまう。そういうことだろう。
「だめだめ、すみませんて謝られると介助の手、出しにくくなるの！」
厚意、謝意を超えた仕事の中のことだからか。しかしこれからもありがとうは言うつもりでいる。
「こんな体になってなんて言わない！　病気のせいだってわかってるからどうやって治すか、みんなで考えて動いてるんだから」
看護する、介護する側にしてみれば、やっても無駄だと言われたのも同然なのだろう。
彼らの言葉を皮相的に受けて自分の中に生じたものは負の暗い感情でしかなかった。思い起こして恥じ入るばかりだと伊勢は思った。言葉そのものと看護師の顔は思いだせるが名前は、雅を除けばいまだに知らない。相手の胸の名札を、彼らの心の在り処をよく見ていなかったからだ。ほとんどの場合自分は、自身の身体と心しか見詰めていなかったと、そう思う。一方で雅だけに心を開いたわけが胸のどこかで引っ掛かる伊勢だった。
「そうなってしまうのも脳梗塞という病気の症状の内、本来の伊勢さんはきっと、相手の立場を理解して動ける人だと思います」
野瀬言語聴覚士の言葉は雅に対する気持ちにも適用されるのだろうか。何か嬉しいような、そうでないような、摩訶不思議な想いに囚われた。

4

回復期リハビリ病棟の四人部屋に移り、同室の三崎晴彦という患者に挨拶をした。ちょうど古希七十歳で何と二度目の脳梗塞で入院中だという。親しく話す間もなくリハビリ病棟の主任看護師が来て

この病棟のオリエンテーションを受けた。立ち会うはずだった幸子は残念ながら面会禁止をうけて断られたとケータイで知らせてきた。事前の福本師長の説明とは食い違うが、最初の感染が救急患者からのものだと判明して厳格な適用になったらしい。十日ほど手持ちの着る物でしのぐしかなくなったが、シャワー入浴は週二回あるというので不潔にはならないだろうとのんきに構えた。一方行動抑制の方は、療養病棟の方針を踏襲せず、主任看護師の身体機能検査や車椅子操作の習得度の確認で大いに緩和された。結果車椅子を使えば室内はもとより食堂やリハビリ訓練室への往復も介助無しでＯＫとされた。退院間近ということで「動くな」から「動けるだけ動いて慣れろ」に急遽方針が変わった。伊勢はそう解釈した。不満があるわけがない、むしろ待ち望んでいたことだった。

若い看護師たちが他人の命と健康を真摯な姿勢で護っているのを理解した以上、患者である自分もそれに応える努力をしなければ無礼だろう。新たに意を決した伊勢は、田口理学療法士に向かって熱い言葉を吐いた。

「もう少しきつめのトレーニングで鍛えてもらえませんか。どんなに辛くとも耐えてみせますから」

「溝口先生からも特別に要請が来ていますから、お望み通りに筋トレしましょう。脳梗塞の発症前、何かスポーツか筋トレをやってたでしょ？　伊勢さんなら大丈夫でしょう。これは意志の、心の問題だけではなくていまもなお残っている筋力如何なんです」

彼は続けた。約一と月に及ぶベッド生活で相当筋肉自体が衰え、さらに脳神経疾患で筋肉相互の連携がうまくとれないので歩行に支障が出ているが、それでも以前に造られた筋肉組織の残りははっきりと確認できていると。

「食後高血糖症なので運動療法として筋肉に負荷をかけるトレーニングはしていました。筋肉はあればあるほどジッとしている間も血糖を消費すると聞いてましたから」

「ですね、それで退院までの自分の目標をどのあたりに置いていますか？　どの程度の行動範囲に目標を、という意味です」

「当初は自宅の中を歩き回れる程度にと考えていましたが、お陰様で現状は既に可能になってます。杖を使っていいですから五百メートル四方ぐらいは外散歩をしたいです。自主トレをより可能にするためにも」

「いいでしょう、具体的な目標を立てること自体出来ない患者さんが多い中、頼もしいですね。では、当初の一般的なリハビリ計画を捨てましょう。痛い時は明確に声に出してください。反対にやる前から無理だ、出来ないと言うのは厳禁です、無理かどうかはプロの責任において僕が判断します。了解ですか？」

「はい。お願いします」

彼の眼付が変った。もともと、どこか侍の風情を感じる先生だったが本気度を増したのかもしれない。リハビリルームでは消極的で指導通りに動かない患者を宥めたりすかしたりしながら悪戦苦闘している指導員をよく見かける。これは推測だが、彼も同じで日々イライラしてストレスが溜まっていたのではなかろうか。

「では、早速。このリハビリルームの中を広めに杖無しで二周した後、ここを出て杖を使って病棟フロアの廊下をいいと言うまで回り続けてください。一回り二百メートルあります。もちろんスタッフステーションの前も通ります。伊勢さんがここまで歩ける人だということを見せてあげてください。いい自己紹介にもなるはずです。僕は背後から姿勢を見たり、麻痺した左足、患側に並行して歩いたりしながら伊勢さんの筋力を観察します」

そう言うと彼は「失礼」とトレーナーの左足の裾を膝まで巻き上げ、脹脛(ふくらはぎ)を露出させてからゴーサインを出した。

伊勢は「なるほど」と声にした。しかしこれは偉そうでいけない。杖を宙に浮かせながら通常歩行で部屋を一周した辺りだった。斜め前にある高さ五十センチほどの訓練台の上で独り座っている老女がいた。両足を前に投げ出し、尻から上が真っ直ぐに立っている。以前他の先生から聞いたことがあるが、長座位というらしい。彼女は待ちくたびれたのか両掌でマットを叩くようにして尻を移動させ台の端に向かっていく。自力で降りようというのだろう。案外速い。ただ、上を向きながらなのでそのまま進むなら端から転落する。骨盤骨折や大腿骨骨折もあり得る落ち方になるだろう。素人でもハッとする光景だった。方向は区々だが十数メートル離れた場所に居た三人の男性療法士が一斉に「危ない！」と声を上げて走り出した。速い。田口先生もその中の一人だが、瞠目したのは二十代と思しき一人が最初に到達して落下予想地点に滑り込んだことだ。落ちる老女を真下で護るつもりなのだろう。後の二人が危機一髪、彼女を両側から制して事なきをえている。身を挺してという言葉は巷間よく耳にするが、文字通りの光景を間近で見たことで少しく昂奮している自分がいた。

親子だからいいといえばその通りだが、同じ市内に住みながら七年間も無沙汰を続けていたのに手土産一つ持たず風の便りに聞く初孫も連れずに空身で訪ねてきた息子がいま、目の前に居る。幸子はそれでもお茶ぐらいはと出してやったのだが、信人は胡坐をかいて固まったまま半ば俯いて黙り続けている。幸子はお茶を啜りながら息子の訪問目的を探り、行きついた結論は無心だった。それ以外に無いとしたらかなり腹立たしい。離婚までして僅かな貯金と年金を

頼りに暮らしている親に何を求めるというのかと。
「ずっとそうしているつもりかい？」それなら自分の家でもできるだろうと付け加えることだけは自制した。
「店が潰れそうなんだ、二十万貸して。親父には面会禁止で直接頼めないから手紙を書いた」
「入院したときお前に連絡したよ、面会禁止なんて二、三日前のことじゃないか。死ぬか不随になるかって病気なのに無視したんだよね、お前」
「あの時は店が忙しくて」
「語るに落ちてりゃ世話が無い。順調な時は貧しい親なんて放っとけ、困ったら思い出せかい？　父さんは忙しいからだろうって笑って悪口なんか一回も口にしてないよ、お前、結婚してから人が変ったね、損得しか考えない人間になっちゃった」
「もういいだろ、何を言われても反論できない、その通りだから。もう俺のためにとか、店のためにとは言わない、南帆のために、孫のために貸して。このウイルス騒ぎが終わったらきっと返すから」
「すぐつまずいたところを見ると、店もはやっていなかったってことだね」
「ああ、亜矢の性格が接客に向いてないんだ。あれじゃ客足が遠退く。大都会じゃあるまいし、ここらあたりの居酒屋は常連があって初めて成り立つ」
「そこまで判ってても変えられない女なんだ、あの人は」
「俺は婿だからな、何を助言しても経営方針は譲ろうとしない。店長なんて名ばかりだよ、正直なところ失敗した」
「失敗って何に？」分かっていても言わせたかった。
「きついな。結婚に！」信人の眼が吊り上がった。
「無心はいいけど、そんな金額をもらえると考えた根拠は何？　是非知りたいんだけど」
「金くれなんて一度も言って無い、貸してくれって頼んでるだけだ」
「信じろと言われても無理だよ、あの女は甘くない。返す気持ちがあるような女なら絶交同然のお前に行ってこいとは言わない」
「亜矢は関係ない、自分で決めてきた」
「かばうんだね、お人好し。お前はもう少し常識人だよ、うちの子だから。いいよ、お父さんにケータイで連絡して振り込むから口座番号書いて帰って」
「いま現金でもらえないか」
「あるわけないだろう、わたしが六十五歳になり夫婦保険が満期になって少しばかり入るから、それが振り込まれたらだよ、そこから回してあげるって言ってるの！　入院とリハビリでかかる費用をそれで補う予定だったんだからね」

万一伊勢が承知しなかったら自分の僅かな貯金から不足分を補填するつもりで応えた幸子だった。バカな子ほど可愛い、そんな言葉があることを思い出した。

「苦しいのかい？　年金、二人分入るのに」

「お前何にも知らないんだね、大学まで出て。うちは年金二人合わせても一か月あたり十五万程度。そこから法的な控除、家賃、水光熱費、電話代、生命保険料なんか引いてみな。今度の入院費だってかなりの負担なんだよ」

「ごめん、恩に着るよ」

信人が初めてすまなそうな顔をした。出されたお茶を口にする心の余裕さえ失った息子を見ながら幸子は、これ見よがしに大きく肩を落とした。

療養病棟とは違い回復期リハビリ病棟では朝昼晩三食とも全員が食堂で食べることになっている。食後の服薬もここでするので重要な時間でもある。開始時刻の三十分前頃から患者が集まり始め、看護師の手で配膳され食べ終わるまでの間はかなりの喧騒が続く。患者同士の会話、看護師の各種呼びかけ、食器類や椅子が動かされる音、車椅子の行き来、これらに壁掛けの大型テレビの音声が加わるからだ。当初この雰囲気に慣れていない伊勢は、お茶のお代わりに応じてくれた若いナースに「それにしても賑やかだね」と少々呆れ気味に声を掛けた。すると彼女は特に注意も指導もしていない訳を教えてくれた。

「もともと食事、排泄、入浴は介護の三大要素だけど、食堂は患者さんが日常生活に復帰するためのトレーニングの場所でもあるの。知らない患者さん四人が同じテーブルについて談笑できるようにしたり、こちらで時々メンバーを代えてみたりするのもそのため。静かにされるとかえって心配なの」

名前を胸元で確認したら「看護師村上千鶴」とあった。十代かと見紛うほどに可愛いというか童顔というか、資格取得年齢から推して少しくおどろいたが、何よりもリハビリという人生経験がものを言う年配のナースが多い中で圧倒的に目立つ存在だった。

「新人さん？」と失礼を承知で訊いてみた。怒るかと思いきや、返って来たのは笑顔のうなずきと、意外なナースになる動機についての一言だった。

「この病院ではまだ研修中です。あ、看護師としてもビギナーです。憧れているナースの仁科雅さんと同じ病院で働きたくて公募に応じたの」

「そう、がんばってね」伊勢は思わず相好を崩した。その後で、それにしてもと首を捻った。感染力の強い新型ウイルスに罹患した患

者や看護師の隠れ陽性者が一人でもいたらこの環境下、アッという間に悲惨なことになるなと。もちろん自分もその中にいる。

広い食堂は三食を済ます場所だが、合間の時間は患者の休憩室であり患者同士の談話室にもなる。その片隅に百冊ぐらいで一杯になりそうな本棚があるのに気がついたのは転入して四日目のことだった。すぐ近くのスタッフステーションでちょうどパソコン入力をしていたナースに訊くと、時間を持て余した患者が自宅の蔵書を家族に持って来させて読み退院の際に置いていった本が増えてきただけで、読むのにも増やすのにも許可など必要が無いという。背表紙を健側の右手で指差しながら読むに足る本を探していると背後に人の気配を感じた。

「ここはコミックやハウツー物が多いです。本らしい本は面会室の書棚にありますよ」と男の低い声。

「そうですか」と返しながら振り向くと、灰白色の顎髭をきれいに整えた老人が居た。見るからにやせ細っている。

「伊勢さんですよね、三崎といいます」と半ば腰を折って彼が顔を寄せてきた。初対面なのに名前を知っていたのには少しく驚いたが、彼は伊勢が転入してきた翌日には注目していたという。理由を聞くと、四人一組のテーブルに着くと間もなく周囲の三人を笑顔にしたからで、皆が皆、傷病で屈託を抱えリハビリ訓練で少なからず疲れているはずなのに不思議だったと答えた。近くのテーブルに居たらしい。氏名は卓上に指定票が貼られているので確認したとも。

「お調子者という側面はたしかにありますね、私は」と頭を掻いた。若い看護師たちが頑張っているのに触発され、患者の側にも何か出来ることがあるはずと考えた末の短絡的な結論、一番の感謝の印は患者が明るく前向きになることだというのがそれだった。

「落ち着いているようで粗忽、大人びた子どもと言われながら育ちました」と追加もした。

三崎老人は肩を揺すって笑いながら缶コーヒーを差し出した。

「整形外科からですか、ここ」と言いながら一礼をして缶を受け取った。話しましょうという同意のつもりだった。

「二度目の脳梗塞で入院です」

脳梗塞は再発率の高い病気だと溝口医師から何度も警告されているが、目の前の人は三度目の罹患があれば死を覚悟していると寂しそう笑った。彼によれば、初回の発症は、定年間近とはいえその後の薔薇色の老後が約束されていた私大の准教授だった頃のこと、視覚にも差し障るとのことで退職になったらしい。経済的に困ることは無かったが二度目の発症後に離婚を迫られ応じたことから性格が曲がり、身体的に回復期に至っても鬱のままだったという。自分自身がまだ患者なので悲惨な身の上話を聞くのは辛かったが、離婚、

死ぬ覚悟など予想した事態だったことに加え、精神的に癒され自分本来の姿に戻れた理由に魅かれて聞き入った。どんな悪態をつかれても耐え、明るい笑顔で接してくれる若い看護師を毎日見ているうちに、非情に立ち去った妻や娘、さらには病に挫け周囲に甘えきった自分自身にも憎しみを持っていた心が浄化されていったという。

「私も同じです、肉親でもなく本来愛情の対象でもない老人相手に志をもって日々明るく尽くし続ける彼らを見ていると、自分が暗く落ち込めば落ち込むほど輝いて見えましてね」遠い昔とはいえ自分にもあったはずの輝きなら尚更のこと…

「まるでフルムーン」と彼がなぜか指差しをして微笑んだ。

「ええ、まさに。私は当初こんな風に感じました。自分本体が真っ黒になったときの太陽と周囲のコロナの輝き」

「なるほど。でも伊勢さん、いまどきコロナは禁句ですよ」

「ああ、そうでしたね」

二人揃って笑った。離れた場所に居たナースが振り向くほどの大きさだった。

「療養病棟でね、雅さんというナースが読んだ本の中の名言で励ましてくれたことがありました、あの人はスーパームーンでしたね、僕にとっては」

「仁科さんね、どんな言葉ですか？　ぜひ聞きたいです」

「体が動かなくなったら心を動かせ、心が動かなくなったら体を動かせ、どっちも動かなくなったら残った命を動かせ」ここまで来て彼は涙を浮かべ、照れ笑いをしてから続けた。「それからですよ、僕は失ったものを数えるのを止め、残っているものを数えて大事にしようと決めたんです」

自在に動く頭脳や体だけではなく妻や娘も失ったものの中に含めてのことらしいと、伊勢は思った。

雅が紹介した言葉は無条件でうなずけた。自分もそうしたい。そうすれば気がつく、今の自分にとって誰が大事で何が大事かということに。

「すみません、寛ぎの休憩室で暗い話ばかりして」と、三崎老人が思いだしたように自分が手にしている缶コーヒーを飲み干した。

「いえ、とても勉強になるひとときでした」

別れ際、彼が嬉しいことを口にした。「そうそうこの持ち寄り図書室、提案したのは僕なんです。ぜひごひいきに」と。彼の想いや動きが既に自分のためを超えて周囲に及んでいる。

「はい、本の持ち寄りにも協力しますよ、本なら配りたいほどあるんです、趣味で小説書いているので」

彼が、とっておきという感じの素敵な笑顔を見せてくれた。

「幸子がいいなら満期保険金の中からあいつに渡していいよ。恥を

忍んで家族のために頭を下げに来たんだろ、その分保険金が少なかったと考えれば済む」

三崎老人が去り一人になるとすぐに会話の内容に刺激されたのか信人の無心の件を思いだした。電話口で情けないと涙ぐんでいる幸子の姿が、まるで目の前のことのように浮かんで消えた。

一人前になった息子として何一つそれらしいことをしてくれないとしても、自分が困ったときだけしか顔を出さないとしても、最初から息子などいないのだと思えば腹も立たない。もしかしたら老いるということは全てを甘受する境地に繋げざるを得ないのかもしれない。伊勢はそんなことを思った。

この日の夕食後、伊勢はベッドに横たわりながら死に纏わるあれこれについて考えていた。ほとんどの場合、命の危機は突然やってくる。不幸にして死亡したとき、周囲から見ればそれはすこぶる呆気ない。人智を超えた自然現象かとさえ思える。救急車の中で漠然とした覚悟という形容矛盾の極みのような想いの中にいた。治療の果てに寝たきりになるくらいならいっそ死んでくれないかなと、付き添っている幸子は密かに願っているだろうなと思い、そうだとしても邪推だとは捉えず当然だろうと内心うなずいている自分がいた。その彼女が、約一か月の入院中に毎日病室に通ってくれたという事実。これを直視するとき、病魔に振り回された自分の心の弱さに呆れ果てる。ところがこの弱さについて言語聴覚士の野瀬先生は、自分の弱さを受け容れ人に甘えることも生きるためには必須のことで、なかんずく患者が恥じるのは間違いだと喝破した。しかもそれが他者の生きがい、張り合いに直結していることすらあると付け加えもしている。

確かに看護師や介護士の職務にはそんな側面があるのかもしれない。患者の制御の利かない好悪の感情や我が儘に堪え、不自由に苛立つ患者の姿を冷静に見詰めて時には父のように厳しく鍛え、時機を捉えて母のように優しく接する。不定期だが患者の全身を清拭し、排泄を介助し糞尿の処理もする。配膳をし、薬を配り、重傷者の食を介助し、それらの一方で看護師なら医師の指示に従い検診をはじめ医療行為を補佐し続けるのだ。何度もこの目で確かめて想う、誰でもできることではないと。さらにそれらを明るく元気にやれと指導されているのだ。いや、指導がある故ではないだろう。彼らは自身の中に献身の源を持っているのだ。伊勢はそう思った。

院内でのいろいろな出会い、記憶に残る笑顔たち、そして記憶に残る言葉の数々。「もうすこし長く居たいな」と残りの日数を指折って口にする自分がいた。

一方雅はかなり過酷な日々を送っていた。

臨時に赴いたはずの救急室で室長でもある筧医師に「当面勤務はこちらで頼む」と極限的に短い指示が出て抜けられなくなったのだ。念のため福本師長に直接確認をとったが、外来患者が新型ウイルスを持ち込む最初の場所が救急室なので子供や高齢者と同居しているナースは全員尻込みをしているらしく、そうかと言って経験不足の者を送り込むことも出来ない。そこで離婚して幼児も実家に預け一人になって仮眠室に起居している雅に白羽の矢が立ったと言う訳だ。雅の個人的事情を知っているのは院内では師長だけ、このところの師長への無理なお願いの代償は高くついたことになる。感染リスクは限りなく高い。しかし恨みがましいことは言えない。プロのナースなのだ、「初心忘るべからず」だ。それに昼食としての料理パンを二人一緒に食べていた時に筧医師と雑談したことが雅をうなずかせる決め手となった。

「先生、ちゃんと睡眠とれているんですか？　からだ壊しちゃいますよ」

雅は、院長を始め院内の全ての医療スタッフに尊敬の念を抱かれている筧医師に向かってつい友人のように気安く訊いてしまった。

「ああ、救急患者の搬入が途絶えた寸暇を惜しんで現場の隅っこで転寝している。スタッフにタイミングをみて起してくれと頼んでね。もっとも頼まなくても起しに来るが」と、クシャっとした笑顔を見せた彼は、まるで親しめる同僚のようだった。

「夜中でも、ですか？」

雅の印象では夜昼構わず救急室で指揮を執り続けている。

彼は「心配するな、こうして今も生きてパンをかじってる」と言い、少し嬉しそうな顔をした。

「わたしが奥さんだったらきっと病院に来て野村院長をつかまえて怒鳴るでしょうね、主人を殺す気ですかって」言ってから、何をバカなことを誤解されると、一瞬だが悔いた。

「うちの妻はわたし毎日熟睡してるわって笑ってたぞ、まあ少しは心配してると思うが」

「少しなんてウソですよ、それ」

「そうだといいね。もう一カ月以上この近くの安ホテル住まいで自宅に帰れていない。俄か独身生活なんだ。しかも最近はウイルスの件で丼や皿を返す必要がある店屋物すら口にできていない。院内の売店でパンや弁当を買って腹の足しにしているよ、時々スタッフの弁当のおかずを失敬したりして嫌われてもいる」

実は「少し」は嘘だと筧は、言葉には出せずに応えた。既に妻の我慢は尽きていて離婚後の暮しを相談しに実家に帰っている。妻の感覚ではかなり長期に亙り結婚生活は破綻していたということなのだろう。それに気づかないほど筧は鈍感でもなければ横暴な亭主で

もない。
「ずいぶんとお痩せになってる」
「ああ、すでに肋骨も浮き出してる、見せようか？」
「い、いえ、そんなこと。先生のファンだというナースだらけですよ、わたし袋叩きにあいます」
「ばぁか、冗談だよ」
終始笑顔だったが、長時間勤務も手伝って、室長の顔はさすがに疲労の色が濃かった。「わたしごときが我が儘言えないな」と覚悟を決めた。
ウイルス感染の重傷者は七十二歳で一人だけ、救急室に近い四室が感染対策仕様の部屋、その一室に移して四人の看護師が交替で四六時中看護にあたる必要があるので一般救急のナース不足に拍車がかかるのだ。ただ最も重い患者の命を救う医療機器エクモがまだ無い。転院先を摸索中らしい。決まれば救命ヘリで搬送される。雅は中程度の感染患者一人を担当するスタッフの中に入った。軽度と無症状の二人の罹患者は通常病室を感染者専用にして入れている。もちろんそこにも顔を出す。ＰＣＲ検査を四日に一度は受けて勤務を続けるのだ。
クタクタになって夜も遅い二十二時、仮眠室で雅は実家に電話を入れた。母親が出て、汐里は寝床に就いたという。
「こんな時間まで働いてるの？　からだ大丈夫？　家も追い出されたんでしょ、この前の電話で仮眠室とか言ってたけど心配だわ、冗談じゃないって感じ。父さんも仁科には怒ってね、そっち行ってぶん殴ってくるって、もう大変だったわよ」
「やだ、止めて。古希の老人がケンカして勝てるわけがないじゃない。それに協議離婚だから。こいつとは一緒に暮らせないという大人の判断が一致しただけ。見掛け倒しを選んだのは私のミスだし。ねえ、汐里は大人しくしてる？」
「小さくてもちゃんと解ってるみたい、ジイジに懐いてしょっちゅう傍にいるよ、賢いねえ。お前との確執まで溶かしちゃったみたいよ、お前に帰って来い、こっちで病院探せば、汐里の心配なしに看護婦の仕事ができるって言ってね」
「ありがと。うれしいな、その言葉。本当は途方に暮れてたのよ。勤め先はいつでもどこでも見つかるとして、汐里が心配だから」
「何だか父さんね、友達が経営してる櫻井病院に相談したみたいなの。ほら、昔少しの間入院したことあるでしょ、あそこ」
「そんなことまで父さんが…」たまらずに涙が溢れ出た。
「おせっかいだなんて思わないでね、心配してるのよ、いろいろ」
「怒らないよ、それほどバカじゃないって、わたし」
「ニュース見たけど感染した患者が出たみたいね、気を付けるのよ、

雅は何でも引き受けちゃう子だから、いいように使われちゃうでしょ、だから」
お見通しだわと、雅は涙を拭いながら笑った。
「病院辞めるには一と月かかる。三月いっぱい汐里をお願いね、四月の入学式はそっちだね、父さんには直接謝らなくちゃ、長いことごめんねって、いい年をして何か小さな子どもみたいだけど」
「言っとくよ、まっすぐ懐に飛び込んで来ればいいさ」
「直に話したいな、父さん、もう寝た？」
「毎日八時ごろには寝床だよ、とっくに白河夜船、汐里といい勝負なの。今度こっちから電話しようか」
「いま配属されてる救急室は仕事中電話不可だし、勤務時間なんてあって無いような状態なので無理。またかけるから」
「ちゃんと三食、ご飯食べないとダメだよ、雅」
見透かされている。かなりいい加減な食生活に陥っている。食欲そのものがなくなっているのだ。
「うん、ほんとにありがと。ごめん、眠気が襲ってきたから切るね」
「ああ、お疲れ。おやすみ」
なぜか涙目のまま夜空を見たくなって窓を開けた。星が小さく弱く光っているが月はいない、ほとんど闇に沈んでいた。少し落胆して視線を下に落とした。病棟の消灯時刻は二十一時だ。目の前の董仙病院の全景はほとんど黒、活動している部署、部屋だけが煌々としている。
「筧先生はまだまだ奮闘かな」
医師と一口に言っても知識、経験、技量は様々、一看護師には正当な比較などそもそも無理だが、一つだけ自分にも解かることがある。医療に取り組む覚悟というか掛け値なしの真摯さだ。筧医師は群を抜いているように見え、雅は大いに尊敬していた。
数日後の三月一日に事務方に末日に退職する旨を告げる。理由は文字通りの家庭の事情、既に家庭は無いから私事都合と記すことになる。院内での「父親」伊勢雅志はその日にはもう居ない、二月末日に退院しているからだ。それから一と月後に自分もここを去っていく。そう、いろいろあったこの地から…。
雅は左手の甲で鼻を擦ってから、右手でゆっくりと窓を閉めた。
「月末に退院するんですってね」
「えっ？　はい」
移ってきてから数日経つが、笑顔の交換や朝晩の短い挨拶はするがほとんど会話が無かった人なので、急な問いかけに驚いた。ベッドは真ん前、真横は指定されたときから避けられているし、お互いに仕切りカーテンを開けている時間は少なかったという事情もある。

十日ほどのお付き合いなので伊勢もさほど気遣いはしていない。それでも相手が話したがっているなら当然応じる。
「若い人は回復が早いな」
自分では若いのかどうかは疑問だが、佐々木というこの人が例えば九十なら確かに「若い」となりそうだ。氏名はベッドの名札で知った。
「失礼ですがおいくつですか？　私は六十九ですが」
「八十七になったな、ついこの間だ」
「もしかしたらですけど、現役時代は植木職人さん？」
実はさりげなくではあったが人物観察はしていた。安心して眠るためにも不可欠なことだった。年齢を重ね縮んだのだろう背丈は百五十五センチ程度にしか見えない。小柄で小顔、当然皺はあるがふっくらとした頬が人の良さを感じさせる。ナースコールはかなり多いが何かしてもらうたびに丁寧にお礼の言葉を発する。朝食時に食堂に向かう前に寝具を丁寧に畳み、必ず着替えてから寝間着もきちんと畳む。歯磨きの励行はまさに模範的だ。戦前の教育と躾を受け、おそらく徒弟制度の下で職を身に着けたに違いない。そう踏んでいた。
「やっぱり隠せないものですな」と笑顔をくれた。
「しかも親方でいらした」
「いまも形だけはトップということですが、もうすぐ倒産すると診立てました」
「今度のウイルスで先が見えない？」
「はい。でも引き金になっただけで、業界は斜陽になっていましたから息子にも植木、造園に拘らなくてもいいぞと、代々の暖簾の負担は解いてやりました」
「失礼ですが、やはり佐々木さんも脳梗塞、ですか？」
「二度目です。最初は炎天下で水分補給がおろそかなままにして血栓が出来ましてね、今度はいわば高齢のせい、なんでも心房細動で産まれた濃い血の塊が脳に詰まったとか説明されてます」
伊勢は深刻な内容ともとれる話なのに半ば笑顔でいる老人に興味を抱いた。
「大分長いんでしょうか、こちらは」
「三カ月ぐらいで他の病院へと追い出されますがね、最初の発症時もこの病院でした」とまた笑った。前歯が一つ抜けているのがチャームポイントになっている。
「退院後はご自宅へ？」なぜか質問魔になっていた。
「さあ？　先のことは考えていません。その方が楽ですよ、周りが寄ってたかってどうしたらいいかを考えてくれますから。転院先とか生活保護如何とか、何か決まったら絶対嫌とかノーとか言いませ

ん、言われた通りに従う余生です。病院暮らしの費用は安価ですから子どもたちの負担も少なくて済む。たとえ会社が倒産しても支払えるレベルでしょう。ま、それも無理になったら見捨ててくれていい。病院やお役所も見殺しにはしないでしょうから」

なるほどと妙に納得する自分がいた。それでも一つ気になる。

「社長だったというプライドもあるでしょ、お気持ちの中で、どう処理されているんですか？」

「脳をやられた人間がそんなことに拘っちゃいけません。世の中的には滑稽でしかない。面倒を見る側にしたって邪魔な代物でしょう、そんなもの。療養病棟であなたも経験したでしょ、孫みたいに若い女の子に抱きかかえられたり、食べ方を指示されたり、下の世話をしてもらったり、体を綺麗に拭いてもらったり、寝間着を着せてもらったり。その都度地位とか名誉とかプライドとか、年上だ、年下だ、男だ、女だと騒ぐバカが時々いるが、見苦しいにも程がある。そう思いませんか」

一時は自分もそうだったと省みて伊勢としては身の縮む思いだった。まるで叱られているような…

「いや、これは失礼をした。こんな口をきくからなるべく他人様と会話をしないようにしていたんですが、あんまり上手に質問するからね、つい調子に乗ってしまった」

老人が恥ずかしそうに頭を下げたところで比較的長い接触は終わった。伊勢は笑顔で応じ、何も言葉にはせず頭を掻いきながらベッドに戻った。

「或る意味卓見だな」と音にならない程度で口にした。到底及ばない境地だと思った。ただ、参考にはしたいが目指す気にはなれない。自分は自分なりでいい。そう結論付けて横になった。

5

退院まであと三日となった日の朝六時、四十絡みのナースが「おはようと」検診に来た。時間的にはそれほど珍しいことではなかったが、バイタルサインを確認した後で、「今日は採血します」と言って、手際よく準備をし始めた。朝の採血は初めてのことだ。

「採尿もするんですか？」今なら一人トイレで問題なくやれるが。

「先生の指示は採血だけ」

あっと言う間に血を採られた。言動に無駄が無い分、見事と言えば確かにとうなずけるが、この人は雅とは対照をなす父型ナースなのだろう。取り付く島もない感じだ。雅によればリハビリ病棟には必須な役割だそうな。井園薫子、何となく名札で確認をした。

「朝食後にＭＲＩ室に行ってもらいます。連絡を待っていてくださ

い」とパソコン架台を早々と出口に向けた。
「退院時の健康状態の確認のようですが、丸一日あれこれと続くんですかね？」
「詳細は聞いてません」
「九時からリハビリルームに行く都合があるんですが」
「今日は各種検診が優先です。ごめんね、いつもの二倍回るの。急性期病棟に引っ張られたり、急な休みが続出したり、ナース不足で」
既に彼女の体は廊下に出ていた。
「もう行って、ありがと」
そう言えば食堂の世話をするナースの数が半減している。察するに病院全体が新型ウイルスに振り回されているのだろう。
「雅は大丈夫なのかな」
すでに身内並みの心配をしている自分が可笑しくもあった。

朝食後車椅子に乗って本を読みながら待機していると、意外にも言語聴覚士の野瀬先生が入って来た。
「いよいよ退院ですね、伊勢さん。いろいろ勉強になったわ、仁科さんも感謝してたわよ、いま救急室のヘルプに回ってるから感染対策上、たぶんお別れの挨拶にも来られないと思う」
わざわざ雅の様子を報せに来てくれたらしい。この人のボーイッシュなスタイルと笑顔も忘れないだろう。実に小気味のいい女性だった。
「なぜ雅さんなんですかね、子持ちなのに」
「いい質問ですね、ご想像通り子持ちのナースは全員派遣要請を断っています。高齢者と同居している人もね。なぜと言われれば答えはシンプルよ、雅さんだから行くと言い、雅さんだから安心して行かせることが出来る」
「解かるような気がします」
「あなただから出来る返しですね」と先生が微笑む。
「先生とはもっと早く、健康な時にお会いしたかった。居酒屋辺りでいろんな話をして」
「口角泡を飛ばして？　それ、いまは感染対策上アウトだわ」
「確かに」と笑顔を返した。
急に伊勢は寂しさを感じた。脳梗塞は自分から多くのものを奪い去り、或いは脆くした。しかしこの入院と優れた人たちとの接触が自分にもたらしたものも大きい。もう少し続けていたい。そんな気持ちさえ芽生えている。ただ、「また来ます」「またここで会いましょう」は禁句だ。病気の再発だけがそれを可能にするからだ。
「あ。来た用件を忘れちゃいけないわね、雅さんはあと一と月で退職するんですけど、県外へ出る前にお別れのご挨拶をしたいので電

話をしますとのことでした。確かにお伝えしましたよ。じゃ、リハビリは遠くて険しい山道、ご自分に見合った歩き方で頑張って」
「ありがとうございました、先生もお元気で」
「わたしも看護師さんに倣って幼児並みの挨拶をします。ジャーね～バイバイ」
雅と一つ違いの年齢だそうだが、ほんとうに子どものような顔立ちなので声は出さずに破顔した、バイバイの仕草だけは真似をして。
ほんの二十分後に溝口担当医が入って来た。どうやら人出入りが激しい一日になりそうだ。
「体調、気分はどうですか、伊勢さん」
「発症後完全に爽快な日は一日としてありませんでしたが、大病を患った身ですから贅沢は言いません。おかげさまで、短期間でここまで来られました、ありがとうございます。許可して頂いて感謝もしています」
「退院許可は担当看護師や師長、リハビリの担当者の意見、評価を聞いてのこと、つまりあなたの回復に向けた努力の成果です、よく耐えましたね。でもリハビリの道は遠くて歩み幅は日々僅か、心折れないように頑張ってください」
この医師とはあまり突っ込んだ話をしていなかった。少しでも体調不良や副作用による症状を訴えれば薬が増えるだけだからだ。医師としての立場から言えば入院中の検診データの悪化は抑え込まなければならないだろう。解かるだけに相当我慢をして来た。最多数八錠になったときはさすがにげんなりしたものだ。それでも面倒見は良かった。筧先生のタイプとは真逆で言動が優しい。部署的なものなのか、性格の差なのかは分からない。いまはどちらにも感謝だ。
「今日の採血の結果は退院当日にスタッフステーションに預けておきます。退院証明書、掛かりつけ医へのデータ書簡、二週間分の薬などと一緒に受け取ってください」
やはりこの先生も多忙らしくすぐに視線を出口に向けた。
「先生、ありがとうございました」と立ってから頭を下げた。
「あ。ＡＴＭのあとで新型ウイルスの陰性確認のための検査を受けてもらいます、検査場所は同じフロアのインフォメーションで看護師に訊いてください。では失礼」
去り際に同室の佐々木老人に声を掛けて、先生は出て行った。また一つ「別れ」が終わった。

「おや、信人、また来たのかい？」
玄関チャイムが鳴ったので出てみると小さな女の子を連れた息子が立っていた。
「もしかしたら孫？」と目を丸くした。

「うん、六年も経ってからで何だけど見せに来た。南帆、バアバだよ、ご挨拶は」
俯いてもじもじしていたが言われてスッと上げた顔は整っていて可愛かった。女の子だから息子似だ、少なくともあの鬼嫁の筋ではない。そう思うと、どういう風の吹き回しかと訝っていた気持ちが吹き飛んだ。
「こんにちはー、よくきたね」と先に声を掛けた。
「こんにちは」やっとという感じで孫が口を聞いた。
「とにかくお入り。何か甘いものあったかなぁ」
「かあさん、いいよ、気を遣わなくても、だいいち気持ち悪い」
中に入ると早速の憎まれ口。期待を裏切らない息子だ。
「ナオちゃん、一年生だねー、お祝いしなくちゃねえ」
自分の言葉に幸子は引っ掛かった。もしかして祝金狙いかと。
「振り込み確認できたよ、ありがとう、かあさん」
以心伝心か？　金の話になった。
三人で木製のお膳の前に座る。
「お前が持ってきたの、お菓子じゃないのかい？」
「あ、そうそう近くの商店街の和菓子屋で買った。どうぞ」
信人が菓子箱を置くやいなや幸子は包みを剥がして和菓子を三つ取出し、「さっそくお持たせで悪いけど、一緒に食べよう、ウーロン茶ならあるから」と冷蔵庫に向かった。
その後を追うようにして信人は衝撃的なことを言った。「かあさん、当面の支払いは凌げたけど、このまま先の見通しが立たないと亜矢と別れるかもしれない」
「言い出しっぺはどっちだい？」と戻った幸子は驚きもしない。
南帆は真っ赤な和菓子を選んで食べ始めた。
「亜矢だけど」
「そうだろうね、いい時だけの夫婦ね、よくある話だ」
また自分の言葉につまずいた。自分も早く伊勢と再婚しなくては結果的に同じことになると。
「お前は居酒屋じゃなくても普通の勤め人になれるんだろ、ちゃんと大学で勉強してたんだし」
「ああ、商学部時代の学友に事情話したら感染症騒ぎがある程度収まったら来いと言ってくれた」つまりは条件付きの採用だ。
「じゃ、いいじゃないか。あ、監護権か？　どっちなの」とっさに子どもには分り難い言葉を選んで訊いた。
「たぶん、亜矢」
息子らしいと思った。肝心なことはぼかして危機から逃げる。
「ナオちゃん、飲み物もおいしいよ、おとなの味だけど」
自分に向けられた皮肉だと息子に解るかどうか。幸子は小さく溜

息をついた。自分のことばかりで父親の病状など訊きもしない。本人の問題でもあるが、結婚後は伴侶の影響も大きい。重ねての無心なら少しは病人の話題に触れればいいものをと配慮の無さには呆れる。無心の口封じを図ろうと決めた。

「この子の入学祝に何を贈ったらいいか分からないし、いまはこっちも大変だからお前に少しだけど気持ちを渡すよ。この子のお祝いにだから、亜矢には内緒にしな、全部取られるのがオチだ」

祝儀袋の買い置きは無い。しかたないのでティッシュに三枚包んで信人に手渡した。

「お父さんはね、入院期限の三カ月いっぱいをかけてリハビリするのを諦めて一ケ月で退院するんだよ、後はお金がかからないように、ここで自主リハビリっていうのかな、自分でやるの。この意味、解るよね、今日は孫を見せに来てくれてありがと。ナオちゃん、パパに何か買ってよって、おねだりしていいよ。元気でね」

「うん、バァバもね。これ、おいしかった」

「バァバの分、持って行きな」と和菓子もティッシュに包んだ。

信人は追加の無心は無理だと気づいたらしく、うな垂れ気味に立ち上がった。南帆が先んじて玄関に向かっている。

息子の無様な姿に幸子は少しく胸が痛んだ。そのとき都合よく思いだしたのは、療養病棟の福本看護師長から聞いた介護の心得、「手を出すな、ただし傍に居ろ」だった。

二月二十九日、伊勢の退院は午後二時になった。スタッフセンターのカウンターで各種の書類を受け取り、諸々を雑に詰め込んだ大きなバッグに注意深く挿し込んだ。看護師はよく知らない人が一人だけだったが、事務引継ぎを受けていたらしく手際よく応対してくれた。勝手なもので流れるように捌く仕事ぶりが冷たいものに映る。

「お世話になりました」

自分のお礼の言葉もどちらかと言うと渇いたものになった。

正面玄関に出るまで幸子の顔は見られない。一人だ。本来なら背負う形のバッグなのだが右手に下げている。廊下を歩くにもバランスがとり難かった。当然杖も使えていない。感染対策は徹底していて退院日といえども、たとえ妻でも中へは入れなかったのだ。自分の検査結果は陰性だった。もちろん陽性なら出してはもらえない。

二階でエレベーターを降りたとき、「え？　ああ、仁科雅さんでしょ」の声に足が止まった。どうやらナースが二人、死角になる場所でおしゃべりをしているようだ。悪気はなかったが雅の名に立ち止まり聞き耳を立てた。土曜日なので外来患者は居ない。

「そうなの、知らなかったわ、三月いっぱいなんだ」

「診療病棟のマドンナが居なくなればキッコの心も安らぐね」

「失礼ね、あんな人ライバル視してないわよ」
「はいはい、そうですか」
「雅はね、男の先生に人気があるのよ、それと師長にもね、何を命じられても奴隷のように従うから、それだけのこと。患者の我が儘をいちいちチーム医療に持ち込むし、居なくなればナース全体の職務もスムーズになるわよ」
「そういえば彼女、新型ウイルスの看護も命じられて従ったわね、あれは驚いたわ、キッコなんて速攻で拒否だったのにね」
「当たり前でしょ、わたし、既婚者だし子どももいるのよ、感染したらどうするの、若いから私は軽症かもしれないけど、家庭の崩壊目に見えてるわ、わたしの職務領域は脳神経外科の療養病棟なの、救急室じゃない、弁えなくちゃ。何笑ってるのよ」
「ううん、ものは言いようだと思ってさ」
「それに雅、後一か月で退職なんでしょ、だから病院の無理を聞いただけ。病院側にしても辞めていく人間が罹患してもナース不足的には同じだし、まあ、どっちもどっち」
「相変わらずキツイな、先輩は。わたしはちょっと残念なんだ。いろいろ教わったし、新人の村上なんて雅さんがいるからって就職先をここにしたんだって」
「何だ、磯村も隠れ雅ファンか、この会話もトラップかい？」
「ひどいな」
伊勢はナースのやり取りに心奪われてか、背後に居る人の気配に気づくのが遅れた。ハッとして振り返ると救急室にいた先生だった。
筧医師は人差し指を唇に当て、「静かに」というサインを出した。
「もう行くわ、言っちゃうとね、感染拡大のこの時期に感染患者の看護を命じられて行くのはバカ、家にも帰れず仮眠室泊りを続けてろくに入浴も出来ない雅なんて特に無様だわ。とにかく利口なナースは行かないわよ」
伊勢の横を勢いよく通って筧が廊下のコーナーを曲がった。
「吉瀬！　バカはお前だ、批判はいい、まっとうな部分もある。お前が拒絶した理由にも納得がいく。だがな、感染患者の看護に赴くナースはバカと罵るお前は許せない。これからもそういう気持ちでここに居るなら病院の恥だ、即刻辞表でも書いて、そういうナース大歓迎という適当な病院に行け。仁科が要請に応じたのはあと一と月で退職するからだとぉ！　お前、あと少しで退職すると解かっていながらリスキーな場所に行けるか？　仁科は仕事に対する姿勢が根本的に違うんだよ。磯村、土曜日で外来が居ないとは言え、例外はないと言い切れるか。廊下でこういう話をするリスクに気づいたら相手がたとえ先輩でも注意する気概を持て。つき合う先輩は選ぶことだ」

「筧先生、すみませんでした」
磯村と呼ばれたナースが謝る声を聞いて、伊勢は彼らに気づくように咳払いをしてゆっくりと歩き出し、角を通り過ぎるときにきつい目で一瞥を加えた。筧医師の叱咤、指導に協力するつもりだった。もちろん雅を軽蔑したナースへの憤りもあった。
正面玄関から出るとすぐ右側にバスの停留所がある。幸子は待合のベンチに座っていた。
「おーい、このリュック背負うの、手伝ってくれ、左手が利かないとこんなのまで背負えないんだ、参った、かなり重い」
「しばらく出入りできなかったからね、少しずつ荷物引き揚げることと出来なかったわけだから、いいよ、わたし背負う」
幸子はいとも簡単に背負ってみせた。嬉しいが、自分が身障者になっていることを目の当たりにするのは辛くもある。
「あっと、言い遅れた、退院おめでとう」
「ああ、幸子のお陰だ」とベンチに腰を下ろした。
「先生たちや雅さんをはじめ看護師さんのお陰だよ、わたしは何もできていない」
「一か月近く毎日来てくれたじゃないか、ありがと。どうする、この足で再婚の手続きに行くか？」
角を曲がって近づいてくるバスが見えた。
「それもいいけど、その日を忘れないように三月三日にしようよ」
「桃の節句か、ちょっと少女趣味だな」
二人で小さく笑っているうちにバスが着いた。
「じゃ、そうしよう」
「それときょう退院のこと、いちおう信人には知らせておいた」
「ほう、電話に出たのか、あいつ」
「ハガキでよ」
降りる客が終わって乗り込む前に空を見た。抜けるような青だった。

「まさか来るとは思ってなかったよ、何年ぶりだ？」
信人は待ち合せのファミリーレストランに入ってくる商学部時代の友人城田市郎を出迎えて握手を求めた。相談があるので後日自宅以外の場所から連絡すると伝えたときのことだ、明日行くからどこで落ち合うか言えとなったのだが…、まさに、まさかだ。
城田はすぐに応じると、「握手いいのか？　俺、東京からだぞ」と髭面を崩して笑った。
感染防止のため人と人の接触を可能な限り控えろと毎日のようにマスコミに喧伝されているからだろう。
「車じゃ大変だったろう？　わるいな、来てもらって」席について

信人は、感謝の気持ちを込めて言った。
「さすがに電車で来るのは、俺も怖い。ドライブしたかっただけさ、籠っているのは性に合わん。早速だが何でまた、急に人生を変えるような決断を下したんだ？　ま、お前らしいと言えば言えるが」
「もう屈辱的な毎日に耐えられなくなって、くだらん理性は捨てることにした」
「破壊的な理性概念だな。おい、何か食いたい、お前は喫茶の類の注文か」そう言いながらスマホでもいじくるようにして店のアイパッドらしきもので発注をしている。「俺はカレーライスとドリンクバーだが、どうする？」
「同じでいい、俺も喰いたくなった、朝飯まだなんだ」
「離婚も考えているらしいな」
「相変わらず鋭いな、たぶん合意のもとで近日中に成立する」
城田はさして驚きもせず「そうすると、我が社に入社する前に上京することもあるわけだ」と信人の顔を鋭利な目で見た。
「ああ、親元に身を寄せるという選択肢は無いからな」
城田はここでなぜか大きくうなずいた。
前に進むための最後の屈辱。信人はこの日この時をそう捉えていた。仕事さえ手に入れば立ち直れる。そういう自信は失ってはいないのだと。母親も言った、「お前は居酒屋じゃなくて普通の勤め人になれるんだろ？」と。卒業後に大手商社に勤めてもいた。城田はその経歴を知っているのだった。
「十分ぐらい外に出る。その間に来たら先に食べてろ、すぐに戻る」
城田が出て行ったあとで信人は腕組みをして目を閉じた。
惨めではないと思いつつも心が俯く。昨夜床の中で気持ちを整理した、今の俺が無様かどうかは他者の見方だ、惨めかどうかは当の自分の心が決める。前を向いて行くために身を縮めるのに惨めさはないはず、意地でも凛としていようと。
言葉通り十分と少しで戻って来た城田は、「幸いＡＴＭの横に封筒が常備されてた。これで少し勢いをつけて東京へ来てくれ」と薄緑色の封筒を差し出した。「遠慮する仲じゃないだろ。ただ、一つだけ希望がある。お前が仕事に就くための資金としてだけに使ってくれ。そうしてくれればこの金はお前に対して失礼なものではなくなる、家族の為とかそういう使い方は勘弁してくれ、第一お前の苦境が何一つ解決できなくなる」
衝撃を受けた。昔の自分もこうした配慮を他者に対してしていたような気がする。貧すれば鈍する。いつの間にか自分はビジネスマンとしての大事なものを喪失していたのだと。
「ありがとう、遠慮なく厚意に甘える。きっと返すから」
「勘違いするな、厚意じゃない、投資だ。だから万一この金を手に

してお前がどこかに消えてもうろたえたりはしない。株を買ったら会社が倒産して無価値になった、俺はそう思えば済む。お前自身が一生自分に恥じるだけのことだ」

彼とはもう大きな差がある。小さな自分を客観視してそう思った。

「おっ、カレーが来る。はやく仕舞え、ここでは数えにくいだろう、五十近くある」そういうと城田は「けっこう可愛い子だな」と運んでくるウエイトレスの方を見詰めだした。これも金を手にする姿を見られたくないだろうとの配慮らしい。信人は一礼をしてから封筒に手を伸ばした。

三月三十日、実質上の勤務最終日の午後三時、雅はスタッフのレストルームで筧と昼食を共にしていた。救急患者の搬送が無くなったタイミングで筧医師が雅に院内の売店で弁当を買ってきてほしいと頼んできたのがきっかけで、雅にとっては最後の挨拶をする場を貰った形になった。正規の昼食タイムから外れているので二人きりにもなれた。どちらかと言うと筧の配慮かも知れない。

「野瀬君から聞いたんだが雅の就職先は櫻井総合病院なんだって？」

「先生、唇の左にご飯粒付けてます」と雅は指差したあとで「はい、娘のために実家近くの職場を選びました」

「そうか、じゃあ、別に院長の櫻井享治先生を慕ってという動機じゃないんだ」

舌先で器用に口元を拭い粒を収納した筧を雅は可愛いと思った。見たこともない専門医の一面だった。

「先生ご存知なんですか院長先生を」

「ああ、糖尿病の専門医としてかなり有名なので、領域は違うが著書その他で知ってると言えば知ってる。偶然なのかどうかは知らんが、君の勉強のためには大いに役立つと思う」

「私がナースになろうと決めた病院でもあり、うちの父とは知り合いなんです」

「ほう、お父さんも医者か」

「いえ、父は公務員でした。わたしも今回勤めると決まってから電話で父と話していて初めて知ったんですが、出身大学が同じで年齢も同じ七十、懇意になったのは現役時代に地域医療の充実を図る会合を通じてだそうです、父は当時市の福祉課にいたらしくて」

「なるほど、いずれにしろ幸運だな。ここでは救急医療を主に扱ったわけだが、今度は生活習慣病を主に扱うことになる。双方に共通するのは、さて何だ？　雅」

「高齢者に襲いかかる深刻な病魔、ですね」

「ああ、それでいて、ある意味真逆の処し方が求められる」

「はい。でも先生、救急医療も回復期に至ると糖尿など生活習慣病

の治療と共通な側面を持ちます」
「うん、それは何だ」
「一番問われるのが患者自身の強い意志になります」
「なるほど、糖尿に関して言えばだが、薬なしで治せると断言した高名な医師もいたしな」
「あ、先生、お茶も買ってきてました、すみません」
雅はお茶を手渡しながら思わず笑みを浮かべた、会話がクイズ形式になっていると。
「いずれにせよ雅、せっかくだ、上をめざせ。ここでは夜も昼も無くて不規則で、新しい知識を勉強という形で求める時間さえなかったはずだ。その意味でも素晴らしい転機だ」筧はペットボトルのお茶を一気に飲み干した。
「でも、看護師の上とおっしゃられても」
「それは自分で調べろ、考えろ。一例を挙げれば特定看護師だ、厚労省の研修を経て特定の診療補助行為三十以上については医師の具体的指示がなくても看護師自らの判断で行うことが出来る。うちの病院にも数人いる。俺からの宿題だ。いまは君に感謝だけを伝えたい、ありがとう、元気でやれ」
筧はそう言うと立って握手を求めた。
雅も立って両の掌で筧の手を包み深々と頭を下げた。
「ありがとうございました、先生のことは忘れません」
筧は雅の頭をポンと叩くと時計を見て足早に部屋を出て行った。
「医師と看護師が握手しちゃった、感染予防上のタブーなのにね、でも簡単に手を洗うのはもったいないしなぁ。先生は簡単に洗っちゃうんだろうなぁ、きっと」
雅は微笑しながら首を傾げた。

6

約束したフルーツパーラー「杏の木」に入るとすぐ一番奥のボックス席に居る私服姿の雅と小さな女の子を見つけた。伊勢は、黒い半袖の上着と真っ白なパンツというナースのお仕着せ姿しか見たことが無いので雅の艶っぽい感じに老いた胸の奥を突かれる想いがした。嬉しいことに、店内に客が誰も居ないせいかマスクも外している。自分の方は無症状感染をしていた場合母子にうつしてしまう懸念があるのでマスクはそのまま外さないことにした。
「ここ、すぐに分かりましたか」立ち上がった雅が微笑んで言った。女の子も真似をしてか、すっと立った。母と子であることはすぐに分かった、多くの場合父親に似ると言われているが、この子は母親をそのまま幼顔にしたようだった。

「うん、若い女性が好きそうなドアのデザインだしケーキの匂いが開け放った入口から溢れ出ていたからね、じつにお洒落だ」おしまいの一言は雅への感想でもある。ただ雅は、少し頬が削げ、着衣の上からでも分かるくらい痩せていた。もちろん口にはできない。激務のせいだと解かっているからだ。

「汐里、ご挨拶は？」

「こんにちはぁ。でもね、だれだかわかんないもん」

「汐里は初めてだったね、ママのお父さん、汐里のジイジだよ」

「ジイジもバアバも、ずっと一緒だったよ、おとといまで」

「汐里には言ってなかったけど、誰にでもジイジとバアバは二人ずつ居るの。これでジイジには二人とも会えたね」

うまいな、それでいいと伊勢は笑顔でうなずいた。

「へえ、そうなの、じゃあジイジこんにちはぁ」

三人が一斉に座り、近づいてきた女子店員にそれぞれが好きなものを告げた。

雅は自分で思いついた紹介の仕方に満足していた。たとえこの場に夫の、いや既に元夫なのだが、あの面倒な蒼汰が顔を出したとしても通用する。挙式もせずの結婚、彼は実家の父に会ったことが無いからだ。それだけではない、三十八も年上の伊勢に対して芽生えた御しがたい愛情の根拠を自分の父親への想いに擬することで制御できるのだ。それに蒼汰だけではなく目の前に居る伊勢とも今日限りで二度と逢うことはない。そう決めている雅だった。

「そういえば退院後のリハビリはご自分でやるってことですけど、奥さんが介護担当ですか？」

「ああ、その担当って表現、ぴったりかも。じつは病院には妻だと申告してたけど正確には元妻、戸籍上は離婚していたし、同居もしていなかったんだ。それでもお互いにちょくちょく行き来してた。緊急搬送された当日と前日はこっちが泊まり込みで戻っていてちょうど一緒に居たときだった。君にも内緒にしていたのは元妻じゃ、いろいろ引っ掛かって病院内での言動が不自由になるからなんだ、ごめん。でも退院後の三月三日には同じ幸子と再婚をしてる」

患者の数だけそれぞれ事情がある。病院側は治療や介護の必要性から患者のプライバシーに立ち入らざるを得ないし、チーム医療をしている関係で守秘義務があるチームスタッフに限ってだがその個人情報を共有する必要もある。確かに知ったとしたら雅は報告しなくてはならない。告知されなくて良かったと思った。

「そうでしたか。私の方にもいろいろあって、ご存知の通りこの子の父親と別れたの。協議の末の確定でね、汐里の親権、監護権ともにわたし。もちろん仁科には扶養義務は残るけど、たぶん扶養料はまったく期待できないでしょ、その程度の人でしたから。引っ越し

に伴って董仙病院も去ることになりました」
もう全て伝えていい。雅はそう思った。それがきっとお互いの複雑な感情を整理することにもつながるからだ。
店員が来て、注文したものがテーブルに並べられた。雅はクリームソーダ、汐里はフルーツパフェにストロベリーショートケーキ、伊勢はホットコーヒーで、それらしくて何とも面白い。
「ジイジ、すぐ食べていいの？」
大人の話に首を傾げて黙っていた汐里が満面の笑みで確認をした。
「ごめんね、静かにいい子にしてくれていてありがと」
ジイジにされた伊勢としては孫として見る義務がありそうだ。応えたこの一言でレジでの支払い役は決まった。
「君のことだから次の職場も既に決めているだろうけど、遠いのかい？」別に会いに行こうというのではない。だいいち未だ完全ではない左足がそれを許さない。
「一応円満退職なので、父の知り合いが経営している実家近くの病院に勤務します。この子の養育のためにも最適でしょうからホッとしています、隣の県ですけど」敢えて勤務先の名は言わない。伊勢もその意味は解かるだろうと思った。
「もしかしたら、いつか話してくれた准看のおねえさんが居たあそこか？　ナースを志すきっかけになった」
「そうなの。これも父と和解したから可能になったんだけど」
「君ならどこでも通用するだろうし誰からも好かれる」
自分の言葉にハッとして少し寂しい気持ちになった。そうか、考えてみれば自分も彼女を好きになった大勢の中の一人。そして自分は彼女が温かく接している大勢の患者の中の一人にすぎないのかもしれないと。勘違いが心を温かくしていた不思議さ。
「しかし夫婦や親子も含めて人と人との繋がりって、思ったより弱くて脆いよな、つくづく実感するんだ、この頃」
伊勢は少し前に息子信人の行状を知って確信をしている。亜矢との離婚が成った信夫から一人東京に行く、借りた金は当分の間返せないと電話で幸子宛てに告知があったのだ。あえて告知と言おう、一方的に告げると幸子の話は全く聞かずに切ってしまったという。
「この頃について言えばだけど、新型ウイルスが一番怖いかもしれない、人の心の奥底にあるものをあぶりだすから。しかもそれが周囲に感染していくし」これは雅の実感だった。
「若いのに奥が深い見方だね。人を支配する究極のものは恐怖と欲望、死に対する恐怖と生に対する欲望で実質的に一致、このウイルスはリトマス試験紙みたいに人間を試すんだから何よりも怖い」
雅は蒼汰がコロナ禍の中で温和から狂暴へ激変したのを目の当たりにして彼の本性を知った。だから伊勢の言葉に大きくうなずけた。

「そうだ、お別れの前に物知りの伊勢さんに訊いておこう。じつは言語聴覚士の野瀬さんから聞いてるの、博識だって」
お別れの前に…、伊勢は雅が使ったこの一言に心がつまずくのを感じた。解かっているが口にしないで欲しかったと。
「君がこの僕に質問？　嬉しいね」
伊勢の反応の遅れはなぜか、それが解かる雅だったがどうしてもいま、この場で使わなければならない言葉だったのだ。
「勤めていた処の名前なので退職するタイミングで訊くのも間抜けなんですけど董仙総合病院の董仙の意味、何のことかご存知ですか？　スタッフが誰も知らなくてずっともやもやしていたので」
確か病院内での伊勢との会話では敬語や過ぎた丁寧語は使わず意図的にためぐちを使い親しみやすくするという院内の方針に従っていたが、いまは素の自分に少しずつ帰る必要があった。
「うーん、医者をたたえる美称の杏林という言葉は知ってるよね、本当は杏の林と書くこっちを使いたかったと思うけど、すでに大学病院名や大規模な薬局の名に使われていたので杏林の出典たる中国の故事に戻って董仙を見つけたんだと思う。医師で董奉という名の立派な人という意味で董仙、その董仙の杏林という故事が名前の出処だと思うよ、学者じゃないから保証はしないけど」
答えながら伊勢は、こんな話をしていていいのか、もっと二人の関係性を総括したいのにという焦りにも似た気持ちがあった。
「人の名のとう・ほうから来ているんですか。ありがとうございます、ああスッキリした」
この笑顔をもう二度と見ることが出来ない。伊勢は、微笑みながら長いスプーンでクリームを掬いだした雅の顔を目に焼き付けていた。もしかしたらほのかな恋だったのか。大幅に歳が離れていてそんなことがあり得るのか。もっと違う、特別な関係性だったような気がする、既成のカテゴリに入らない何かだ。難しく考えることで感情の高まりを抑えようとする自分がいた。
「今日はこれからすぐ赴任先へ？　というか、新しい住居へ？」
「はい、とりあえず実家に。出勤日も祖母にこの子をみてもらえるので」意識してとりあえずにした。本当はずっとそうしたい。両親の介護も視野に入れている。
決して時間を惜しんですぐにというわけではない。ただ、この場で距離を置き始めないと自分の気持ちにけじめがつかないと思うのだ。患者の伊勢に父の愛を感じて甘え、その胸に抱かれて泣いてしまった責任は自分にある。あの時の言動が伊勢に与えてしまったものの、もしかしたらそれは、取り消しできない罪？　雅はそんなことまで考えていた。
「おや、眠っちゃったね」

椅子に座ったままで目を閉じている汐里を覗くようにして伊勢が微笑んだ。紛れもなく好々爺の顔だった。
「甘いものたくさん口にして満足したんでしょ、来年は小学生なんだけど、女の子にしては幼すぎるかなぁ」
離婚して復氏し恵庭姓にしたのは汐里のためでもある。そうしなければ、汐里がいつまでも蒼汰を引き摺る恐れがあるからだ。入学前なので氏の変更が友だちに知られるということもない。
「伊勢さん、リハビリの道は長くて険しいと思いますけど、どうかお元気で明るく過ごしてください。素敵な思い出を有難うございました」
伊勢はうっかり涙目になってしまった。慌ててポケットティシューを取りだし目ヤニでもぬぐい取るような仕草をした。滑稽だが仕方がない、雅に心の負担をかけることに繋がるからだ。
「もう理学療法士から何度も言われていると思いますが、決して発症前のご自分の身体に戻そうとして無理をしないでください、まじめで頑張り屋さんに多いんです、良かれと思ってリハビリ運動をし過ぎて健康を害したり、思い通り戻らないことで絶望してリハビリそのものを諦めたりする人。自宅で一人、何カ月も何年も続ける。強い意志が求められています」
「雅、もうやめてくれないか」
「え？」
伊勢はうっかり呼び捨てにしてしまった。雅が驚いて訝ったのも無理はなかった。少し慌てた。
「優しくしないでくれ、別れが辛くなるから、頼むよ、雅さん」
伊勢も気付いて雅さんと言い直した。胸が詰まり言葉がもつれて撥ねたのだ。
「伊勢さん、ハグして今すぐ別れましょう」そう言うと席を立ち伊勢の横に来た。目が潤んでいる。
伊勢は腰かけたまま健側の右腕だけで雅を引き寄せた。頬が雅の胸に当たる。こらえきれずに涙が溢れ出た。雅の掌が優しく髪を撫でているのが分かった。病室で雅が伊勢の胸にオデコを付けて泣いた、あのときとは真逆だった。
「ママぁ、どうしたの？　ジイジ大丈夫？」
汐里の言葉に二人はハッとして体を離し、笑顔をつくった。
「汐里、お別れだからジイジにハグしてもらいなさい」
雅が汐里の手を引いて横に戻って来た。伊勢は同じ姿勢のまま、両手を広げた汐里を嬉しそうに抱き寄せた。
有難う、これでいいんだ、もう行くよ。伊勢は心の中で自分に向けて言葉にすると、「汐里、元気でね、ママを助けてやってね」と、ゆっくりと立ち上がった。

「うん、だいすきだからそうする」
「伊勢さん、これ後で読んで。お手紙書いたの」雅がハンドバックから正方形の封筒を出して寄越した。
レジを済ませ店の外に出ると、絵柄のついたマスクをした雅と汐里が揃って胸の高さで手を振った。もう十数メートル先に移動している。「またな」手を振って応じながら唇の動きだけでそう言った。ナースと脳梗塞患者の間の別れに「また会おう」は禁句だ。それが叶うということは病気の再発を意味するからだ。それほどに再発率は高いという。それに、たとえ伊勢が再発したとしても、搬送される先の病院に雅はいない。二度と逢うことは無い。それは伊勢の中ではすこぶる重たい現実だった。
気を取り直して杖を急がせ、いつもの散歩コースに入った。とにかくがむしゃらに歩きたかった。脳梗塞と突然現れたコロナ禍がもたらした一夜の夢、雅との交流はそういうことだと総括をした。性的なことが何もない、まるで少年の初恋のようなものだ。炎のように燃え上がりたいのに自ら抑え、燻り続けるだけ。その少年が六十九歳なのだから笑える。それでもこの稀有な記憶が失われることは無いだろう。そう思った。
目の前の橋を渡れば河畔の遊歩道になる。おとといの大雨がつくった濁りが残る川面を見ながら河畔に曲がると、御影石で造られた腰掛が並んでいる。その一つで休んでいた老女が立った。
「幸子、これって偶然か？」
「ここを通ると思ってた、帰ったら居ないから散歩だなと思ってさ。掃除と洗濯は午後にするから、とりあえずファミレスに行かない？」
「ああ、そうしよう、いつものランチセットにするかな」
偶然な訳はないと解かっている。数十年も一緒に居れば互いに何を思い、何に迷っているのかは想像がつく。一面怖くもあるが、それが夫婦というものだろう。
「知っていたのか？　今日のこと」
「まあね、重病に罹れば看護婦さんが心の伴侶になるのは当然かもしれないし、若いし綺麗だし、敵いっこないわよ。どう、いまが一番寂しい？」
「うるさい、そこまで言うか、ふつう」
「あ、今日からランチに割引券も使える」
「現実はシビアだな。そういえば再婚後の生活保護の適否通知どうなったかな…午後二人して行くか？　保護基準の合否判断はいつ頃になるかだけでも知りたい。まぁ、期待はしてないけど、気持ちだけはスッキリするだろうし」
「再婚からちょうど一と月だし、あれこれ落ち着いたし」
話している途中で伊勢は気がついた、いつの間にか幸子が健側の

右ではなく患側の左を歩いていることに。患者の万一の転倒に備えて不自由な体側に寄り添うのが介護役のルールなのだった。
「きっと格好つけて、レジで会計済ましたでしょ」
「ああ、孫の汐里の言葉でそういうことになった」
「孫？」
「五歳の女の子でね、孫として雅さんが演出したのさ」
「きっと可愛い子でしょ、あの彼女の産んだ子どもだもの」
伊勢は川の流れの音が急に大きくなった気がした。
ふと妻の横顔を見ると終わりの近い桜が散らした花びらが髪の毛に載って揺れていた。
「あ、そうだ、手紙もらってた」
「彼女から？」
「そう、手渡しで。ちょっと読んでいいか？」
「どうぞ、あなた宛てでしょ。川辺でラブレターなんて、ちょっとすてきじゃない」
「ばぁか、妄想が過ぎる」と照れながら封を切った。
ところが中を覗き最初に見えたのは千円札二枚だった。「読まれていたか」嬉しいような哀しいような心遣いだった。「やっぱり家に帰ってからにしよう、ほら散歩の人が近づいて来たし、幸子も読みたいんだろ？」
「いいわよ、どっちでも」と微笑んだ。期待外れが怖いに違いない。幸子はそんなことを思った。
伊勢はポケットには戻さず、ハンドバッグに仕舞うようにと幸子に手渡した。
川面で遊んでいた鴨が急に羽ばたき宙に浮いた。

帰宅してから伊勢は、幸子と一緒に雅の手紙を読んだ。幸子は大きくうなずいた後で、なぜか伊勢の肩をポンポンと軽くたたいてから台所へ立った。残念でしたと言いたかったのかもしれない。
「ウイルスに感染し症状が中程度の患者さんのお世話をしていたとき、その人が重症化を密かに望み死に安息を求めていることに気づきました。いつもは救急搬送されてきた人の無意識な生に対する執着に心打たれ、人間は案外しぶといのかもなどと感心しながら患者さんのその力の手助けをしていましたので少しショックでした。見聞きした経験から言えばいつも人の死は突然に訪れ、人の命は儚いものでした。それなのに私は生きている日々を楽しまず本気で愛さずあれこれ不足ばかりが気になっていたような気がします。父の人を見る目を信じず反対を押し切って結婚した夫が他の女性に走り、娘まで放置するようになり、さらに感情に激して私を殴り倒した時もそれらの原因が自分にもあるとは考えませんでした。そして離婚、

わたしは住む家を失い、子どもを抱えて勤務することも不可能になりました。とった手段は絶交中の父のいる実家に子どもを預けること。精神的にも現実的な生活面でも絶体絶命に陥ってあの日私は伊勢さんの前で泣き崩れたのです。ぶざまな私に接しながらあなたは原因につき何も訊かずに大きな心でただ癒してくださいました。あのあと恥ずかしさとともに気づいたのです、私はあなたを父親に擬えていると。その想いが実家の父との確執を溶かしたのだと。いまは何も考えずにこの先もひたすら実家に、父に素直に甘えようと決めることができたからです。新しい職場では初心にかえり仕事の上で少しでも高い所をめざすつもりです。

すみません、長々とプライベートな話をして。伊勢さんに会えて良かった、しかもこういうときにと感謝の気持ちでいっぱいです。

くれぐれもお身体を大切になさってリハビリに挑まれますよう。大事な奥様にも宜しくお伝えくださいませ。

本当にありがとうございました　　恵庭雅拝

もうひとりのお父さんへ」

（完）